

松平啓運記

全

210
マ4





明治十九年
八月 點 査 章

貞純親王 号桃園

經基王 鎮守府將軍 始賜源姓

御名ヲ六孫王ト稱シ奉ル京都九

条ノ邊ニ社ヲ立六ノ宮推現ト崇奉ル

瀧仲 鎮守府將軍 正四位下 落髮ノ後多田新癸意ト申撰

州ノ多田院ト申奉ル是ナリ

賴信 鎮守府將軍 河内守 賴義 鎮守府將軍 伊豫守 義家 鎮守府將軍 陸奥守

雄徳山八幡宮神前ニテ元服シ給ヒ賴義ノ

長男タルユヘニ八幡太郎ト稱スルナリ



24

義國 式部大輔

義家朝臣ノ三男上野下野兩國ヲ領シテ又安六年下野國足利一、下向シ給ヒ二子ヲ生ス嫡子大炊之助義重ハ上野國ヲ領シテ始テ新田ト稱シ二男義康ハ下野ノ國ヲ領シテ足利新判官ト稱ス然ハ義國ハ新田足利兩家ノ祖也

義重

新田大祖名新田太郎後大炊介
建仁二年正月辛卯鎮守府將軍

東海道十五

々國ノ管領タリ然ルニ安德帝治義四年頼朝卿義兵ヲ舉給ヒ關八州ヲ悉ノウチナヒ

々給ヒ鎌倉殿ト申奉リシコ口ホヒ義重上州寺尾ノ城ニ居住シ給ヒ元來義家朝臣ノ嫡孫ナル故ニ自立ノ心ガシ有テ暫ク頼朝卿ニハ隨ヒ給ハサリシカトモ後ニ飯伏シ給ヒ輔佐トシテ功有當家大祖ナルヲ以テ慶長年中東照神君御願ニヨリテ鎮守府將軍ヲ賜也

義季

義重四男上州得川居住故名得川四郎
當御家祖

頼氏

世良田三河守

教氏

世良田次郎

家時

世良田又次郎

瀧義

世良田孫次郎

政義

有親

右京亮

親氏

先代御啓運記

松平御初代

親氏公遊行上人相共御廻國之事

三州松平郷へ御安住之事

藪田源五郎御退治之事

所々へ御勸出之事

御屋形城々外山上御本丸御構之事

中山十七名御入領并氏神之社御造營之

事

御遺言并御逝去之事

御後室八橋觀音堂御參詣并稻荷大明神
御託宣之事

御二代

恭親公岩津城御攻取即岩津へ引越御在
城之事

岡寄城被入御手之事

大平城御攻取之事

御三代

信光公長坂山下等御退治并長澤御夜討
之事

安祥城以御謀畧攻取之事

御四代

親忠公為安祥城主御近邊之櫻井福釜上
野藤井等之小城被入御手并岡寄之城御
魚守之事并滿性寺太子堂御修復之事

伊保舉母八草上野等之御敵雖攻岡寄城
御防戰勝利之事

三後彦次郎之事

御五代

長親公御世駿州今川氏親雖攻岩津城無
勝利井田鴨田表へ敗軍引退事

長親公從安祥御出馬井田表御戰御利運
之事

駿河勢敗北之事 并御息方へ御領地配分之

事

御六代

信忠公依御不攻御家中不和へ早御隱居
之事

沖之島弁才天御參詣之事

所々御遊歴之事

御七代

清康公西三河御征伐 并尾州岩崎科野兩
城御攻取之事

正月鷄且御瑞夢 并御夢合之事

東三河守利城御攻取 并松平右京殿御討

死之事

東三河吉田城御攻取并田原降參事

御連哥御興行之事并連歌師宗長事

於御城御能諸士見物之事

尾州森山御出張并松平内膳殿及逆付御

横死之事

御八代

井田原并八幡宮御靈驗之事

廣忠公御幼年御沈落他國御整居并御成

長之後茂呂城へ御飯入之事

信貞攻茂呂城之事

岡寄城御飯入御安座之事

廣忠公御政道之事

上野合戰之事

若君御誕生之事并鳳來寺藥師如來御靈

夢之事御夢想并御夢合之事

三木合戰之事

安祥城合戰之事

松平藏人殿御死去之事

廣忠公御天死之事

安祥城攻之事

松平御初代

親氏公遊行上人ト共ニ廻國之事

青天ニ雲ヲ興ス驪龍モ時到ラサレハ淤泥
ニ潜リ頭ヲマジヘテ魚蝦ニトセナヒ大虚
ニ風ヲ生スル猛虎モ勢ヒ衰テハ坑塹ニヲ
テイリ尾ヲツレテ兒童ニ媚ルノツクヒ時
運ノ盛衰物ニ十然リ況ヤ人世ニ於テヲヤ
爰ニ太郎左衛門尉親氏公ト申奉ルハ奈モ
清和天皇ノ御流多田満仲ノ後胤タリ源泉

統々ノ御系圖右ニ記セルガ如シ然レ共御
先祖滿義公御幼稚ノ時節御一族新田義貞
討死アリシヨリ以來敵國日々ニ榮へ月々
ニハヒコツテ武威ヲ四海ニ振フ天下ヲ掌
ニ治シカハ新田ノ門葉ニ根ヲ掘リ枝ヲ断
テモホシケレハ天地廣シトイヘトモ滿義
公御枕ヲ安泰ニ置ル、所ナカリケルニ日
ツテ御後見ノ者只一人召連レ位ナレ給ヒ
シ世良田ヲバ行衛定ノス忍ヒ出サセ給ヒ

ツ、東路ハヨソノ人目モツ、マシク思召
シラヌヒノ窺紫ノ方ニ餘下リ遠國ノ波濤
ニ漂泊シ曲浦長汀ノ旅路ニ心ヲツカレ
姓ハカヘ御名ヲ改メラレ孤村徧境ノアヤ
シノ賤ノ男ニ御立マシハリアリテ時世ノ
變ヲ御覽セラレ徒ニ年月ヲ送給ヒヌルコ
ソ本意ナケレ御老後ニ至テサスル古郷御
カヘリカシクヤ思召レケン世良田ニ御帰
リ暫ク御住居有ツルカ程ナク御病死有其

御子息政義公其次親季公其次有親公二三
代カホドハ民間ニ陸況シ初九ノ象ニ隨テ
御志ノ外ニ埋レサセ給ヒテ空ノ打過給ヒ
ケリ其次親氏公御殊ノ勝テ御氣質聰明叡
智ニシテ才藝モスツレサセ給ヘハ諸人は
ヲ見トカメ奉リ其御末也ト人モシリ御名
モ少ク顯レシカバ世間ノ聞ヘモ不可然ト
未萌ノ殃ヲサケ兼テ御由緒モヤ有ケン藤
澤ノ遊行上人ニ尋子至リ給ヒテ彼上人ト

師弟ノ契約ヲアソバサレ縁リノ御髮ヲ押
切ラセ給ヒ徳阿彌法師ト申奉リテ上人ト
共ニ廻國ヲナサレケル去ル程ニ上人三州
矢作ノ道場ニ宿ラレツル其夜ニ至テ徳阿
彌公俄ニ風氣ノ御所勞指癸リ御難儀ノ躰
ニマシマセハ上人醫師ヲ招キ良藥ヲ求メ
与ヘラレケル然處ニ酒井村与左工門元來
上人ニ由緒有其折柄幸ニ參詣セラレシニ
依テ彼ヲ丁寧ニ頼ミ置レ遊行上人ハ都ニ

登給ヒケルサレハ徳阿彌公御所勞久敷滞
リヌルニ依テ酒井与左工門ノ宅ニ移シ奉
リ是依テ御保艱アル漸ク四ヶ月ヲ經テ御
平復ニ及ヒケリ亭主与左工門尉先祖ハ新
田家ノ者ニテ新田太郎義重ノ判形ノ古證
文ナド取出シ尊覽ニ入奉レハ徳阿彌公虜
ノ御守ニ納メ置レツル所ノ御先祖ノ御判
形ニ契ヲ合セタルガ如クナレハ御心底ヲ
殘サレハ御先祖ヲ名乗ラセ給ヘハ与左工

門驚キ其後ハ君臣ノ禮儀ヲ彌々尊敬シ奉
リ御髮モ延サセ給ヘハ御還俗ヲス、ノ申
サレケル

或云三州東酒井村庄屋神谷氏カ屋敷ハ
イニシヘ酒井与左工門殿古屋敷ナリト
云傳フ

親氏公三州松平郷へ御入之事

春ノ頃三州松平郷ニ太郎左工門尉在原信
重ト申テ宗門繁昌シテ殊ニ文武ノ道ニ心

ヲヨスル處士アリ女子一人ノミ有テ家ヲ
傳フヘキ男子ナシ爰ニ酒井与左工門尉才
覺ヲノゾラシ徳阿彌公ヲ還俗サセ給ヒ松
平太郎左工門尉在原信重ノ猶子トシテ即
信重家督ヲユツリ隱居シテ徳阿彌公御名
改サセ太郎左工門尉親氏公ト申奉ル元來
富貴ノ家ヲ御詣繼ノ事ナレハ貧賤ノ者ニ
ハ米錢ヲ与ヘ孤獨ノ者ヲセ御愛憐有テ慈
悲深重ニマシ、ケレハ日ニ増シ月ニソ

ヒテ忠節ノ御家人出來リテ近里隣郷ヲノ
ツカラ飯伏シ奉リ隨順セヌモノヲハ弓矢
ヲ以テソイラケ給ヒケル

一説御親子共ニ相州藤澤清淨光寺ニテ
御出家有長阿彌徳阿彌ト申本書ノ如シ
一説信州ノ合戦ニ打負給ヒ三州大濱称
名寺ニテ御出家有依之御父長阿彌塚有
之

一説杵平村へ御移太郎左工門尉申後徳

阿彌ト申杵平村ニ時宗安善寺ト云旧跡
アリ杵平村ニテ大般若經ヲ書セ給ヒシ
御奥書ニ七應永七年杵平徳阿彌此年号
ニ至テ今享保三年戊戌迄貳百九十九年
又云三州黒田村ノ正受寺ト申ニ七御由
緒有之

藪田源五郎御退治之事

其頃藪田源五郎忠元トテ氣質褊強ニシテ
喧嘩ヲ好ム若者有松平近キ林漆ノ里ニ住

シ家來大勢抱置近邊ノ村々ヲ押領シ我意
ヲ働キ富貴ニホユリ利ヘ親父公ニ對シ無
禮ヲ尽ス事度々ナレドモ若輩タルニヨリ
テ許置ク所ニ度ヒカサナレハ御堪忍ナリ
ガソノ或時御人數ヲスソツテ御鷹野ノ跡
ニ出立給ヒ彼カ住居ヘ不意ニ押懸ラレ早
速忠元ヲ討取給ヒアハテサハヅ家來大勢
討果シヤツテ諸方ヘ追テラシテ松平ニ飯
ラセ給ヒケル

親氏公所々御働之事

親氏公有時中山邊御
御人數ヲスグツテ宵ヨリ松平ヲ打立有山
谷ヲ越テ未明ニ麻生藏之助カ城ニ密ニ打
寄セ城ノ躰ヲ御覽スル處ニ隨分ノ小城ナ
レドモ要害キヒシク搆ヘケレハカリソメ
ニモ兼取ラレベキトモ見ヘサリシ所ニ御
人數ノ中ニ名譽ノ礫打ノ上手アリケルカ
火袋ニツブテヲ卷コメ城端ニアユミヨリ

テエヒヤツト聲ヲカケツ、ケサマニ十五
六計リ打コメケレハ折節谷風俄ニ吹立テ
ヲヒタ、數焼上ル城内ノ者共騒キ立テ門
外ヘカケ出ル所ヲ草ノ葉ナンドヲナグ如
ク大勢切伏ケレハ藏之助妻子從類一同ニ
城内ニテ焼死ケリ支ヨリ二重粟大林へ祭
向アル所ニ鶴頭坂ニ大木ヲ切ツシ大勢
險難ニヒカヘテ待カケタリ此關所多勢ヲ
以テ打破ルトモタヤスク越カタク細道ナ

レハ先金谷寺ニ入テ暫ク御陳ヲ居ラレ日
モ漸々暮ケレハ夜半ニ一キレ河ヲ越山ヲ
メクリテ小林ノ里ヘ打出給ヘハ二重栗内
記谷々ノ勢ヲ引卒シ大林ニ出張ス親氏公
ソレカラレ者トテ馳廻リテ下知ヲナシ給
ヘハ互ニ打者ノ鞘ヲハツシ相懸リ打テ懸
リシノキヲキツル鏑ヲコリ火出ル程戦フ
タリ敵ノ大将ニ重栗内記親氏公ノ御矢先
ニ懸リテカツバト卧ケレハ郎等共取テ引

立肩ニカケ慈雲寺ニカケ込皆一同ニ腹カ
キ切テゾ伏タリケル其御威風ニ恐レヲナ
シ田口ノ中根泰梨ノ栗生奥岩戸ノ天野柳
井田ノ山内弓弦ヲハツシ甲ヲ脱テ降人ニ
出夫ヨリ毎日ノ出仕ヲコタラストゾ聞ヘ
ケル

御屋形城外山上御本丸御構ヘ之事

中山十七名ハ大形御手ニ入ルトイヘトモ
権ヲ子タミ威ヲアラソフ輩御近邊ニ多カ

リケレハ不意ニ押寄或ハ夜討ヲカクル事
モヤアラント御油断ナリカタシ思召レ御
屋敷ノ近所ノ山上ヲタイウケ空堀ヲ深ク
堀門塙矢倉堅固ニシテ中ニ御殿作り結構
有士卒ヲ込置レ夜中ハ是ニ御苗リ有常ニ
ハ御屋形ニゾヲハシマシケル

中山十七名御手ニ入事并御氏神社御

造營之事

去程ニ親氏公ノ御武勇ノ御名譽高クシテ

中山十七名トテ七千貫ノ所ハヲノツカラ
御手ニゾ屬シケル其頃シモ御近所梁山妙
昌寺住僧シキミヲ折ントテ高山ニ登リケ
ルカイツ、ニヨリ來ルトモナク白髮ノ
老翁忽然ト來現シ山ノ半服ニ生シタル松
ノ枝ニ復ヲカケ置テ休ラヒ居タリ彼僧ア
ヤシト思ヒテイカナル人ニテマシマセハ
道モナキ山中へ來リ給フ國ハイヅコニカ
ト尋子ケレハ老翁答曰吾ハ關東ノ者ナル

カ此松平ノ里ニ我子分ノセノ居住ス故ニ
我モ又此山野ニ立忍ヒテ陰ナカラ見守也
ト云カト思ヘハ夕チマテ見ヘス成ニケル
住僧ハツト手ヲ打テ去頃親氏公ノ御系圖
ヲ拜見セシニ御先祖代々關東ノ御素生ナ
リ扱ハ氏神ノ來現シ給フナラント思ヒテ
頭テ親氏公ヘ此由ヲ申サレケレハ神佛ノ
不測凡慮ノ及フ所ニアラス吾家運神明ノ
冥加ニ叶ヒ捨サセ給ハサルノ奈誠ニ喜悅

ノ至ナリトテ則地形御見立アリテ蜂カ峯
ノ大明神ノ宮ヲ御近所ノ山上ヘ移シ有關
東ノ御氏神暨竈六所大明神ヲ御勧請ナリ
御宮造リ新タニ成就シタリケレハ御子孫
繁昌御武運長久ノ御祈リノタノ折々御參
詣アリトカヤ扱件ノ笈拭杵枝葉シケリテ
今ニ梁山ニ有トカヤ扱又御領地ノ政道正
シク萬民ヲ撫育シ神社佛閣ヲ崇敬シ五倫
ノ道ヲ堅ク守リ萬事ニツキテ善根ヲ植テ

レケレハ何様積善ノ家ニハ餘慶有トカヤ
ナレハ次第ニ御門葉サカヘ御子孫次第ニ
繁榮ナラント皆人末ノモシソノ覺ヘケ
ル

中山七名之内麻生村ハ松平村ヨリ二里
余ニ南ニ有但柳田村ハ比志賀村ノ内ナ
リ七名領主天野氏ナリ大林村ニ二重栗
殿ト申是則松平和泉守公御息右近殿ト
申其子孫後松平半兵衛傳四郎ト申申

山高薄村領主也大神君御代遠州味方カ
原一戦ニ討死子孫無之由元來比志賀十
二村ハ足利氏高師恭カ領地或ハ三州惣
持寺領也ト高氏公御代御證文有其後乱
世奥平監物押領弘治二年合戦有之此時
松平甚太郎殿討死シ事アリ

親氏公御遺言之事

親氏公御老後ニ至テ御子恭親公ニ向ヒテ
仰ケルハ我父祖近代時ノウシナヒテ世ニ

況淪スル事久シ然レニ我今少々時ヲ得ツ
ルニ似タレドモカ微ニシテイマ少一國ヲ
タニテセテ入レスシテ徒ニ朽ハツル事
無念ノ至リ也我追福ノ為ニハ少シツ、成
共領地切ヒロノ子孫ニ傳ヘ數代ノ中ニニ
度先祖ノ武門ヲ起シ父祖ノ孝艱ニ備ヘラ
ルベシト御遺言有テ永享九年丁巳四月廿
日御臨終ナリ御法名芳樹院俊山徳翁大禪
門トゾ申奉ル

御後室八橋觀音御參詣付稻荷大明神
御詫宣之事

或時親氏公御後室仰セラレケルハ我近年
八橋觀音ニ參詣ノ志アリ殊更彼地ハ吾江
家ノ昔シ在原ノ中将業平朝臣ノ東ニ旅行
アリシ時杜若ノナカノニ飯志ノ哀情ヲ述
ベラレシ旧跡ナリ然レハ其名所ヲ御遊覽
ノツメ且ハ年來ノ御宿願ヲ遂ラレベシト
テ供人數多召ツレ松平ノ郷ヲ御立アリ九

折ナル山路ヲ越テ矢作ノ宿ニ出サセ玉ヘ
ハ是ナン兼高長者カ旧跡ト申カノ淨瑠璃
女ガ遠キ昔シノ妹脊ノ哀モ思ヒ出サレテ
八ツ橋ノ郷ニ御着アリ四方ノ景色ナカメ
サセ玉ヘハ水上川ノ蜘蛛ナルニ渡セル橋
ハ名ノミ残りテ終カニ橋ノ柱斗リ其形ト
テ朽残り杜若ノ澤モナカバニウツモレテ
賤カ田面トナリケル誠ニ時移リ物カハル
有様ハ轉變ノ浮世ノ野分ケニ御哀ヲ催シ

業平ノカレイヒノ上ニアカリ愛執ノ涙ヲ
ソ、ガレケン遠キ昔ノユカリニテ思ヒヤ
ラレテ

思ヒキヤ名ノミ朽セヌハツ橋ノ

賤カニ袖ヌラントハ

一首ノ御詠哥ヲロスサミ玉ヒテ觀音堂前
ニ誓首シ給ヒ現當二世ノ御祈リ事終テ飯
駕ニ打フシ漉泊野ト云所ヲ通ラセ給ヒシ
ニ草刈ワランベヲ御覽シ付ラレテアラ不

便ヤアレ助ケントノ給ヒ童子共ニハ料足
ヲ給ハリテ山野ニ放テ遣シ給フ叔御飯館
アリテ御腰本ニ召連レ遣ハサレシ女童其
氣色アヤシクナリテ口ハシリケルヤウハ
我ハ是菅生ノ稻荷明神ナリ今日我仕フ小
童ワラワヘノ為ニトラヘラレ露命アヤウ
カリケルヲ惻隱ノ慈心ニヨリテ彼カ命ヲ
助ケシ事神感アマリ有其上父祖代々陰徳
ヲウヘテ其根深ク神明ニ通シクリ子孫漸

々ニ繁榮シ其枝葉秋津須ノ外マテモ覆ヘ
シト告給ヒテ神ハアガラセ給フトカヤ誠
ニ唐ノ楊室カ黄雀ヲスシヒテ子孫三公ニ
昇リ色室ハ白亀ヲ放テテ應報無カラサリ
シ側モ思ヒ出テレイマ稻荷明神ノ神託明
ラカナレハ御家運誠ニ末少ノミアリトソ
傳言親氏公酒井ニ御座アリシ時与左工
門尉ノ息女ノ腹ニ御男子出生アリ御名
ヲ与四郎ト申テ酒井ノ家ヲ継給フ御妾

腹ナル故ニ其御子孫今ニ至テ御代々ノ
御家臣タリ

松平御二代

松平太郎左衛門尉恭親公岩津城御采
取即岩津へ御引越御有城之事

恭親公ハ智仁勇ノ三徳兼備ハリタル御器
量ナル上御父親氏公御存生ノ時才藝ニ名
有程ノ浪人ア一ツ抱へ置レ萬端御誓古有
ケレハ弓馬兵法軍學等ハ其家ナレハ申ニ

ヤ及ハス詩歌管弦ノ道迄モ殘ル方ナク学
ヒ得サセ給フ其頃シモ松平ヨリ矢作ノ市
場へ通フ山路ニ強盜山賊度々出テ往還ノ
人ヲナヤマシ山中ノ里々難儀ニ及フ事ア
リケリ其濫觴ヲ尋ヌルニ去ル比親氏公御
誅罰アリシ源五忠元カ殘黨共岩津大膳カ
領内ニ便テ身命ヲ助カリ只今先年ノ讎ヲ
報スルト聞ユ恭親公此由ヲ聞召ツク、
ト御思惟アリテ給フナレケルハ岩津大膳

其悪人等ヲ扶持シテカ、ル悪逆ヲ働カラ
シムルノ奈其ハタイテ奇悟ナリ急キ彼ヲ
退治セスンハ山中定テ迷惑ニ及ン先大膳
カ居城ノ構ヲ委細ニ見届ケ飯ルヘシト侍
二人ニ仰付ラレハ兩人畏テ先順礼ノ躰ニ
出立笈掲ヲカケ荷俵ヲ負菅笠ヲカマフケ
白檜ノ棒ヲツキテ三十三番ノ歌ヲウツイ
岩津ノ里ヲ徘徊シ城ノ躰ヲ窺ヒ萬端案内
ヲ見ス一シテ立飯リテ次第ニ申上リケ

レハサラハ近日夜討ニセラルベシトテ御
家來ノ面々ヲ召集ノテ其旨ヲ仰渡サル然
ル處ニ新参ノ老武者末座ヨリ進出テ御前
ニ向ヒ申上ルハ古來夜討ハ風雨ノ闇夜ヲ
コノムト至トモ此路ノ難所暗夜ニハ其行
列正シカラサルテカケ引自在ナルマシ幸
明日ハ八月十五夜名月ノ夜ナレハ大膳常
々風流ヲコノムモノト兼ル何様宵ノ闇ハ
月ニウソウキ遊宴ニ長シテ深更ニ及ハ、

一定沈醉ノ枕ニ卧フヘシ備ヘルキトセメ
不意ニ突出スルハ兵法ノ要トスル事ナレ
ハ其時節ヲ考ヘ御押掛アラハ御勝利掌ノ
中ニ覺ヘ候ト所存ヲ尽シテ申上ケレハ恭
親公聞召サレ老幼ノ計畧神妙ナリト御感
アリテヒソカニ御勢ヲ催サレ十五日夜松
平ヲ御ウチ立山坂ヲ越ヘテ夜半過ノ比岩
津ニ御着陣アル案ノ如ク城内ニテ宵ノ酒
宴ニ醉フシ門外ヘヨスル迄夢ニモ是ヲシ

ラス聞ノ聲ニ驚キ上ヲ下ヘトアハテサハ
ク慶ヲ恭親公圍扇ヲ舉テカ、レ、ト
下知シ給ヘハ我モ、トカク堀ニ飛込諸
勢一同ニ堀ノ手ニ上リムラ、ハツト城
内ニ乘込敵味方入乱追ツカヘシ火焰ヲ出
シ半時カ程ハ戦ヒシカ城内ノ勢過半討レ
テ叶ハジトヤ表門裏門ヲ闚ミナチリ、
ニ落行ケル大膳途方ヲ矢ヒ妻子ヲハ指殺
シ腹カキ切テ伏ツリケル逃ル勢ヲ目ニカ

ケ田ノ岸沼ノ中ニ追フセ首アマソ討取御
本望ヲソ遂ラレケル其後松平ヲ引越岩津
ノ城ヲ修復シテ是ニ御住居ナサレケレ仁
木細川ヲ初テ近邊ノ村々大形御手ニ入御
領分ヲヒツ、シク廣マリケレハ新參ノ侍
大勢召抱ラレ御家益々繁榮ナリ然レ共上
野舉母御ウルシナク本城ノ外六ヶ所ニ取
手ヲ攝ヘラレ御人數ヲ分テ籠置レケル是
ヲ世間ニ岩津七城ト申傳フ其比シモサレ

子細アリテ三州ノ大小名上浴ノ義アリケ
ルカ各家々ノ系圖御僉儀アリテ中ニ七御
当家ハ源家ノ御後胤ナレハトテ御門跡方
公家衆ニ至ル迄御挨拶御丁寧ニシテ御取
持他ニ異ナル故諸人彌々尊敬シ奉ル

岡崎城恭親公入御手事

恭親公ト岡崎ノ城主西郷弾正左衛門ト不
和ノ儀出來彼城ヲ攻ラレヘキ御文度有テ
既ニ魂魄野迄御出陣ノ砌滝山寺真福寺兩

住寺アハタ、敷走り來リ我等加様々々ノ
存寄候ノ奈御癸向ノ儀一兩日御延引有ベ
シト御鎧ノ袖ヲヒカヘ言葉ヲ尽シテ申サ
レケレハ平日御入魂ノ故御武運御祈禱ニ
丹誠ヲ抽テラル、所ノ老僧ノ異見モツシ
カクソ思召サラハ仰ニマカセ出陣ノ義一
日延引アルベシトテ先岩津ノ城ニ御引取
ナサレケル件ノ兩僧丈ヨリ固寄ニ至テ西
郷彈正左工門ニ對シ申サレハ今度岩津恭

親公ト聊ノ儀ニ付テ御合戦ニ及ヘキヨシ
御衰老ノ御身御難儀推察申タリ貴殿御一
子早世ノ後御世継モナキ御老躰ノ戰場ニ
望ンテ譬御利運アリトモ何ノ思出アラン
ヤ我ニ平生御入魂淺カラスニヨリテ御為
ヲ存シ双方御和睦ノ御扱ヒニ参リタル此
上ハ岩津ノ次男小次郎ト貴殿ノ御息女ト
御縁ヲ結レ彼ニ城ヲ御譲リ貴殿ハ御隠居
アリテ御菩提ニ御入有テ然ルヘシ御同心

ニヲヒテハ急キ岩津ニ参シ其ヨシ相合ミ
和睦サセ奉ラシ此儀イカニト有ケレハ彈
正左工門涙ヲハラ、トナガシ仰ノ如ク
老病ノ身トシテハカ、シキ一戰セトノ
事難カルヘシ去ナカラ敵寄來ラハ家來
共ニ防矢射サセ矢種尽ナハ腹控切テ死シ
事勇士ノ本意タリ然レ比恩愛ノ道断シカ
クシテ姫ヲ不便ニ存レハ免セ角セ御兩
人ノ御計ライニ任スヘシト有ケレハサラ

ハ隨分御計畧仕ルヘシト約諾シテ兩僧又
岩津ニ來リ西郷彈正左工門所存加様々々
ト申上互ニ御和睦有ヘシト申サレケル恭
親公聞召カウ、ト打笑ハセ給ヒ今度ハ
必定ハナヤカナル軍シテ諸人ノ眠ヲサマ
シ勇士ノ名譽ヲ後代ニ殘サントコソ存セ
シニ不能其儀殘念ノ至リ也併戰カハスシ
テ人ノ兵ヲ屈スルハ善ノ善ナリトカヤ彈
正左工門整居シテ愚息小次郎ニ城ヲ渡サ

ハ甚々幸ヒノ事ナリ縁邊ノ儀ハ兩僧ノ御
計ヒニ任ヘシト仰ラレケレハ兩僧不斜挽
テ退出有其後彈正左工門隱居アリテ彼息
女岩津小次郎殿ト御縁組アリ岡寄ノ城ヲ
ヲ御請取有テ御安座ナサレ則小次郎殿御
名ヲ改メラレ松平彈正左工門尉トゾ申ケ
ル

大平城御取之事

恭親公アル時大平之柴田左京カ城攻ラレ

ヘシトテ岩津岡寄ノ勢ヲ催シ夜半ニ打立
先五伊原ノ取出ヘ不意ニ押寄其俣堀ニ衆
カケ水戸口切破リヒタ、ト責込給ヘハ
城内ノ者トモ思マウケヌ事ナレハアワテ
フタノ所ヲ大半討取給ヘハ殘リシモノ
共本城サシテ逃込ケリ其家作りヲコホチ
ソノ材木ヲ雜兵共ニ取持セテ沼田ニシキ
ナラヘ打渡テシリ、ト仕ヨル所ヲ城内
ヨリ差結引結散々ニ倒シツキタヲシ爰ヲ

先道トフセキシカトセ味方是ヲ事トセセ
ス手負死人ヲ乗越フミコヘ面セフラス城
内へ責入散々ニ切テマツレハ柴田今ハカ
ウトヤ思ヒケンミツカラ城ニ火ヲ放チテ
真煙リノ紛ニノカレ出美濃路ヘカ、リテ
北国ノ方ヘゾ落行ケル去程ニ恭親公因寄
大平迄御隨ヘ有ケレ御一生ノ間御安樂ニ
御暮シ有テ終ラセ給フ御法名良祥院殿秀
岸祐全大禪定門ト申奉ル

恭親公御逝去文安二年ヨリハルカ以前
ナルヘシ松平高月院ニ葬リ申トナリ
傳言西郷弾正左工門墓印ノ松大松寺ニ
有トゾ岩津近キ所ニ藪田村ハ藪田源五
故郷タル故ニ彼カ殘黨爰ニ殘リテ山賊
ヲ成ケルトヤ

松平御三代

松平和泉守信光公長坂山下等御追討

並長澤御夜討之事

和泉守信光ハ御氣質剛盛ニシテ御弓勢
モ強御智謀殊ニ深カリケリ泰親公以來岩
津近邊ノ在々大半御手ニ入ルトイヘトモ
大給ノ長坂新左工門尉保久ノ山下庄左工
門尉各小城ヲ搆ヘ其近邊ノ村々ヲ押領シ
ヤ、トスレハ堺ヲウハ、ントスルノ間信
光公御遺恨フカク思召岩津岡崎ノ人數ヲ
催シ御舎弟松平彈正左工門尉ヲハ先陣ト
シテ先大給表ヘ癸向有山中ニハ此事カク

レナク山下庄左工門大給ノ長坂新左工門
大勢引卒シ岡川迄打出テリ兩陣マテカヒ
成ケレハ敵味方入テガヘ東西ニ打破リ南
北ニ追ヒナヒケヲノキサセント戦ヒケル
ホドニ五ニ手負死人數多味方少色ノキ立
テ四五町計リ引退ク所ニ敵勝ニ衆テ追カ
、ルモトヨリ謀畧ノヲ、キ軍ナレハ信光
公兼テ御手替ヲハ林ノ中ニ伏置レ御自身
ハ精兵ノ討手五十人スグツテ松ノ一村茂

リタル山ハナニ上リ給ヒ時刻ヲウカ、ヒ
テマシ、ケルカ追カ、ル敵目ノ下ヲソ
レ射トレ者トモト下知シ給へハ鏖ヲソロ
ヘテ雨ノ降如シサシ結引結散々ニ討ケル
ホトハ將暴ヲシテスル如クニ六七十人
一度ニハラ、ト討倒ケレハ其勢ニ乘シ
テ彈正左工門尉殿トツトカヘシ急ニ改掛
給へハ敵ヲ退ニ度ヲ失ヒ動轉スル所ニ信
光公相圖ノ采幣ヲ上サセ給へハ岩津ノ伏

勢林ノ中ヨリムラ、ハツト討テカ、レ
ハ敵是ニ驚キサハキテ一度ニドツト敗北
スノカスマシト云テ、ニ追討ニ討程ニ山
下庄左工門長坂新左工門兩大將ヲ打トメ
首トツト差上タリ敗軍ノ勢トモ山谷トモ
イワスシテコロビテロビテ寺部舉母へ落
クモアリ足助ノ方へ逃ルモアリ城中ニ少
ク残りシモノ共モ闇ニケシテ人ヒトリモ
アラハコソヤス、ト大給ノ城ヲ采取給

ステニ其日暮ニケリ明レハキノフ討取
給ヒシ山下カ城放火アルヘシトテ松平彈
正左工門保久へ打越給フヨシ傳へ聞城ニ
少々残りシ者共山下カ妻子徒類ヲ引連山
林フカノ逃カクレケレハコレモ無造作ニ
城ニ衆込火カケテ一時ノ灰塵トナシテ大
給へ引取給ヒケル扱大給ノ城ニ御人數ヲ
分ケテ残り置レ岩津岡奇へ御飯城アリ其
後大給城ハ御次男源治郎殿へ譲ラセ給ヒ

ケル又或時暴雨シキリニシテ風アラキ夜
東山中ノ長澤四郎カ城ヲ夜討ニシテ不意
ニ衆取給ヒツ、是ハ御嫡男源太郎殿ヲ居
置セ給フナリ四郎山中古城主富田左近御
子息ナリ

保久城主日下部一徳齋ト云永禄年中大
神君保久村八幡山ニ御本陣スヘラレ御
合戦有テ落城セシトナリ

安祥城以御謀畧御衆取之事

或時安祥ノ城ヲ乗取ラセ給ヘキ御謀トシ
テ御子息方ノ御慰ニナソラヘ七月比掛踊
ヲ催シ笠鉾花ヤカニ調ヲ踊トナソケテ若
キ侍數百人伊達深ノ羽織ノ下ニ太刀カヲ
サシ其警固トシテ侍大勢鑓ノ柄キリケ、
メテ棒ノ如クニ見セ先矢作ノ宿ニテ一踊
ヲトリテ其後安祥近キ西野ト云所有今ヤ
此場廣キ所ニテヲドラント鐘太鼓笛小鼓
ニテハヤシ立テ西野ヘ押サル程ニ林々ハ

云ニ及ハス安祥ノ侍共不殘出テ見物スヲ
トリ終テ飯ル人數ニ打紛テ安祥城ヘ付入
シテ造作ナク城ヲ乗取給ヒ此城ヲハ三男
次郎三郎親忠公ヘ譲ラセ給フケル岩津ノ
城ハ四男ノ源四郎殿ヘ御譲リ有岩津ニ信
光明寺ヲ御建立有之長享二戊申年七月廿
二日御逝去アリシトナリ則御法名崇岳院
殿月堂信光大禪定門トソ申奉ル

傳言信光公御在世ノ中御子孫男女共ニ

四十八人有当代末ノ松平苗氏此御子孫
ナリ御嫡源太郎殿長澤城主松平家名付
セラル次男源次郎殿大給城主徳川名字
並御系圖御附与三男次郎三郎親忠公ト
申奉ル安祥ノ城主ナリ但是ハ世良田名
字ニ成ラセラル

四男源四郎殿岩津城主成セラル

信光公御子松平彌次郎親則始赤坂御屋
敷後又長澤ノ山城ヲ御築其後平地ニ城

御移ニ今三ヶ所ニ傳ヘシ松平上野助殿
迄六代相續アリ上總介御代本家ハ絶ヘ
タリ只今此末葉松平下總守殿同伊豆守
殿同彈正殿同右京殿此等ナルベシ

松平御四代

世良田次郎三郎親忠公為安祥城主御
近邊櫻井福釜上野藤井等之小城入御
手事並岡寄城御兼持之事並瀧性寺太
子堂御修復之事

親忠公御童名竹千代九後ニ小次郎其後右
京允又ハ藏人頭トシ中奉ル御器量萬人ニ
勝レ智仁勇三徳ヲ備ヘサセ給安祥城主ニ
テ其近邊櫻井福釜城ヲ一日ニ攻落シ給ヘ
ハ青野藤井西城ハ其御威風ニ伏シテヲノ
ツカヲ立退キ城ヲ明渡シケル其後御叔父
松平弾正左工門殿御病死ノ砌其御子息イ
マダ御幼少成ニ依テ親忠公ヲ頼ミ置ル、
カ故ニ安祥城ニハ次郎三郎長親公ヲ殘シ

置レ御自身ハ岡寄城ニ御座アリテ万端御
仕置ヲナサレケル其比菅満性寺ニ寺領ヲ
寄附セラレ彼寺ニ聖徳太子ノ御自筆ノ絹
卷有ケレハ其端ヲ御所望有テ御守袋ニ入
ラレ太子堂ヲ御修復ナサレケルトカヤ
親忠公御代岡寄御城代松平紀伊守光重
ノ御息左馬助親貞御舍弟弾正左工門尉
御墓松大樹寺ニ有

延徳四年

松平紀伊守入道榮金

同左馬助親貞

大樹寺御證文

元龜元年因奇左馬助

彈正左工門尉御代

親忠公因奇ニ御移

伊保舉母八草上野等之御敵多勢因奇

城押寄之時小勢ニテ防戰御勝利之事

其比伊保ノ三宅加賀守舉母ノ中将出羽守

八草ノ那須惣左工門上野ノ阿部孫次郎等

各多勢ヲ催シ因奇城ヲ攻ヘシトテ矢作川

ノ上瀬ヲ渡シ井田ノ上野ニ四千ノ人數ヲ
立テ既ニ因奇ニ寄ントスル所ニ親忠公ワ
ツカニ千ノ人數ヲ卒シ因奇ヲ出テ伊賀川
ヲ打越給ヘハ敵ノ勢莫ノ手ニ因テ取込シ
トスレハ味方鋒矢ニ突テカ、リ四方八面
ニ討テ廻リ互ニ追カヘシ火花ヲ散シテ戰
ヒケル敵味方ノ鬨聲矢サケヒノ聲天地ニ
響テ震動スカ、リケル所ニ味方ノ陣ニ三
後彦次郎トテ大力ノ剛士有ケルカ大長刀

ヲ打振テ大勢ニワツテ入打破リカケ通り
テ向テ敵ヲ立ワリ胴切袈裟懸ニ切テ落シ
雷ノ落カ、ルヤウニヲトリカケテナキ伏
ナキ倒シ散々ニ切テ廻ル敵多勢ナリト雖
モ足元シンドロニナリテ見ヘケル所ニ岩津
ノ加勢井ノ口鴨田藪陰ヨリマツ黒ニナリ
カケ出ル敵是ヲ見テドツト崩レ大門上野
ノ川岸迄引退ク岩津ノ荒手ツバイテ追カ
ケル敵爰ニツイテ備ヲ立直スト雖モ裏崩

レテ引立悉ク河ニ飛込々々我先ニ涉ント
モミ合ケル程ニ手負タル落武者ハ皆河中
ニ押倒サレ浮ヌ沉ミヌ流行其有様矢作ノ
川ニ時ナラヌ紅葉ヲ流スニコトナラスサ
レハ寄手ノ大勢残スクナニウチナサレ舉
母上野方ヘソ引取ケル親忠公小勢ヲ以テ
大敵ヲクシキ給ヒケレハ御武勇四方ニカ
クレナシ此御合戦ハ明應二年十月十三日
事也其後大樹寺ヲ御建立有明應九年庚申

八月十日御逝去御法名松安院殿大胤西忠
大居士ト申奉ル

三後彦次郎之事

三後彦次郎今度井田出陣ノ時黒皮威鎧ニ
鍬形打ツル五枚甲ヲ猪首ニ着ナシ長刀拵
ニツキナカラ安心院ノ庭前ニ立寄滝澤和
尚ニ謁シテ申ケルハ某今度戰場ニ於テ花
ヤカナル軍シテ必定討死仕ヘシ老後ノ思
ヒ出是ニ過ス最後ノ一句ヲシメシ給ヘ和

尚卷云烘炉上一點ノ雪トイワレケレ共彦
次郎元來禪話ヲ會セス只忙然トシテ出ケ
ルカ彼カイヒシ言葉ニ夕カハス井田合戦
ニ此類ナキ勸シテ敵味方ニ目ヲ驚カシケ
ル飯陣ノ押フシ鎧ニ立處ノ矢藁毛ノ如ク
折カケテ諸勢共ニ伊賀ノ河原迄引ケルカ
裏カキタル疵深シテ川端ニ長刀ノ柄ヲエ
リ込立スクニニテ死タリケル其日ノ暮方
安心院滝澤和尚ノ面前ニ大キニアレタル

氣色ニテ、ホロノ如ク立向ヒケレハ和尚
扱ハ今日ノ戦ニ彦治郎討死シテ寂前示シ
ケル一句透得セサルユヘニ中有ニ迷フナ
ラント推察シテ大音聲ニ一喝セラレ迷レ
ハカキケスヤウニ矢ヒケリ和尚年來師且
ノ親淺カラサリケレハ其骸ヲ取寄寺ノカ
タワラニ埋葬シ塚ヲ築キ墓印ヲ植ラレケ
ルカ此松枝葉シケリテ物陰ニナルトテ其
邊ノ畑主松ヲ松切捨ケレハ大キニアレ

テ崇リヲナセシカハ代リノ松ヲ植置テ其
後ハ手サスモノモナカリシトカヤ又其後
農人蒔田ノ稻穂ヲホストテ彦次郎殿ヲモ
クトモ御免アレトテ其塚上ニ干置テ飯リ
シニワツト呼テ絶倒シケルカ暫クアリテ
ヨミカヘリツ、語リケルハ恐シキ鎧武者
其怒テ追掛汝夕、モホスナラハ許スベキ
勇士ニ向ヒテ慮外ノ言葉ヲ吐事イワレナ
シトテ長刀ノ柄ヲ以テ三ツ四ツウツカト

覺へテ絶入ヲリカノウタレシト覺へテケ
ル者其跡三筋キワ立テ肌膚シミ黒ミアリ
ケルトハ誠ニ大丈夫ノ氣性死後ノ靈魂迄
モヨノツネニハアラストミユ

松平御五代

世良田藏人頭長親公御時駿州今川氏
親以多勢攻岩津城之慶寄手矢利而井
田鴨田表へ引退之事

長親公ハ智仁人ニ越へテ御武勇又世ニ勝

レサセ給へハ安祥近邊御下知ニ隨ハスト
云事ナシ然ルニ其比今川氏親東三河追ハ
手ニ入ラレシカトセ西三河ハ不隨ニ依テ
伊勢新九郎ヲ語ラヒ寄大將トシテ我手勢
ヲ差添駿河遠江東三河二万余ノ人數ヲ卒
シ其勢已ニ駿河ヲ立テ今橋吉田イフ也ニ着シ
カハ先手ハ下地御油小坂井ニ障ヲ取明レ
ハ今橋ヲ立テ御油赤坂長澤山中藤川生田
ヲ根石原ヲ押テ稻熊ノ谷ニ打越岡寄ノ押

へニハ二連木牛又保伊奈西ノ郡ノ人數ノ
内ヲ引分甲山ニ上ケ置井田ヲ過テ大樹寺
ニ陣ヲ取ハ諸勢ハ夫ヨリ岩津城ヲ稻麻竹
葦ノ如ク打圍テ攻寄ツリ城中ニハ精兵ノ
討手大勢コメリタレハ矢間ヲヒラキテ各
弓弦ヲ喰シノシ矢ヲハネ解イテ押ソソロ
ケ鏃ヲ揃ヘスヲ專ト散クニ射拂ツリ去程
ニ敵味方ノ鯨波矢叫ノ音ハ百千ノ雷同時
ニ落カ、リ押軸ニ忽チ碎ケテ地ニ沈ムカ

トヲヒタ、シカリケル所ニ先ヲ諱ヒ高名
ヲ貪ル早リ雉ノ若武者共小勢ナリトアナ
ドリテ我モ々々ト唐堀ニ飛込ツ、既ニ堀
ノ手ニ上ラントセシ所ニ元來此城ノ攝ヘ
八方ノ所々ニ土山高ク築上テ芝矢倉ト名
付其頂上ニ大石ヲ數千上置其芝矢倉ノ間
ニ手比ノ石ヲ幾重ト七十ノ數並ヘ置レタ
リ先其山ヘ強カノ武士ヲ撰ヒテ大勢上置
時節ヲ見スマシ山々ヨリ一時ニトツト声

ヲ揃へ大石共ヲハネ落シハネ掛リ滝水落
ル如ク透間モナク落シ掛ル間堀ノ中堀ノ
下ニミチ、タル軍勢累卵ヲ押ガ如ク或
ハ群蠅ヲヒシクヤウニ一打ヒシキ微塵ト
ナリシ其死骸大手ノ堀ヲ埋ニケリ後陣ハ
難義ヲモカヘリ見ス上ニ押カクル程ニ堀
ノ端ヲ見物相撲ノ場ノ如ク上ヲ下ヘトモ
ミ合ツリ城中ノ諸勢是ヲ見テ一同ニ件ノ
礫ヲツトリ、雨霰ノ如クニ正ヒヤ声

ヲ出シ喚キ叫テ透間モナク打カ、レハ寄
手ノ大勢甲ノ正面打ヒシキ胴腰ノ骨ヲ打
折打倒レテ又爰ニテモ大勢打殺サレ石ニ
テ手負半死半生ノモノ數ヲシラザリケレ
ハ寄手是ニ恐レヲナシテクワラ、ト
崩レカ、リ蛛ノ子追テラスカ如クニ東南
ハツト引退ノナリ新九郎此由ヲ見テイヤ
、此城ノ体ヲラフトカセメニテ落ヘカ
ラス如何様明日ニモ手立ヲカヘテ攻ヘシ

トテ大樹寺ノ陣引取ケレハ諸勢ハ藪田井
ノ口鴨田井田ニゾ陣取ケル

傳云岩津城ノ寄手散シテ後堀ノ下堀中
ニハ敵ノ死骸ミチ、テ腰兵糧ノ飯打
ミダレテ尸ニマシリタル上ヲ大石ニテ
一面ニ押ヒシキタル有様ハ目モアテラ
レヌ風情ナリシ所城内ノ若武者尸ニ飯
打マセテ押ヒシク岩津ノ城ヤ人ノ鮮桶
カク狂歌ヲツラネケレハ人ノ鮮桶ノ見

立ハ尤モキコヘタリトテ皆人腹ヲカ、
ヘケルゾト

長親公徒安祥井田面へ御癸向御勝利
之事

此ヨシ安祥へ聞へケレハ長親公諸士ニ向
ヒ仰ラレケルヤウ今度寄手多勢ヲ以テ岩
津ノ城ヲ取カ、ミ責ルヨシ城中イカニ防
グトモ久シクハ堪へカタカルヘシ急キ彼
表へ打テ出死地ニ立テ死戦ヲ好ミ運テ天

ニ任セ勝負ヲ一時ニ決セスンハ有ヘカラ
ス谷イカニモト有ケレハ御前ノ面々此旨
ヲ兼リ合戦勝負ハ勢ノ多少ニ寄ス譬敵數
万騎ヒカヘツリ共士卒志ヲヒトツニシテ
千尋ノ谷ニ盤石ヲ一ロハスルカ如ク打テ
カ、リ其備ヲ蹴破テ大将ノ首ヲ取テ軍門
ニカクルカ味方ノ散ヲ戦場ニサラスカニ
ツノ内ニ爰スヘシト拳ヲ握リ腕ヲ張サモ
イサキ能同音ニ申上ケレハ長親公御快ケ

ニシテサラハ最後ノ酒飲ント御盃ヲ始ラ
レケレハ各御流ヲ頂戴シテ何レモヲトラ
ヌ剛者五百余人草鞋ノ緒ヲ角結ニシテ其
端ヲ切テ捨ツ是シカシナカラフタ、ヒ飯
ラサル志ヲ顯ハストナリ夫ヨリ御供申テ
安城ノ城へ打出矢作川ヲ越日名大門ノ岸
ニ打上リテ敵陣ヲ見渡セハ先東三河牛久
保ノ牧野黨二連木ノ平野黨西ノ郡ノ鶴殿
黨作手ノ奥平田峯ノ長篠野田ノ菅沼黨設

樂何ノ稟須瀬ノ西郷田原ノ戸田伊奈ノ本
田遠州ニハ宇都山濱ノ郡井伊谷勢奥ノ山
乾二股濱松ノ勢掛塚原河久滝掛川高天神
勢トセ段々ニソナヘタリ駿河勢ハ新九郎
カ旗本トシテ家々ノ致付タル幡幟ヲ風ニ
翻ヘシテ魂魄野井田ノ原ニ奮ノ子ヲ打ツ
ルカ如ク群テヒカヘタリ長親公兵トセニ
下知シテノ給ハク勢險節短トイヒテ軍ニ
ハ勢ヒト間合トノ取ヤウカ大事也イマツ

前カトヨリ氣ヲ張替ヲセミテカ、レ物前
ニシテ柏子カヌケテ勢カヨハキモノナリ
シツ、ト押寄間合ヨキ所ニテ後足踏モ
ノアラハ討テ捨ヘシト長刀横夕へ後陣ニ
ツ、イテ押給フ新九郎是ヲ見テ敵ハ小勢
ナルゾ引詰テ大勢ノ中ニ取籠リ一人モ、
ラスナト下知スル所無ニ無三ニ打テカ、
リ東西ニ懸ヌケ南北ニ切テ廻リ渾ハ沌々
トアフテハワカレ紛ト紘々ト散シテハ又

聚リイツ終ヘキ軍トモ見ヘサル所ニ酒井
石川柳原青山内藤鳥井太田ノ輩度々ノ事
ニ馴ル剛之者共笠符ホシカナソリ拾敵ノ勢
ニテキレ入後ヨリ切立縦横無礙ニ出沒シ
テ打テ廻レハ何レヲカ敵イツレヲ味方ト
モ見ヘワカス新九郎カ勢互ニ同士討シテ
討ル者數ヲ知ラス廣キ井田ノ原ニ死骸
ハ算ヲ乱シ平地紅波ヲミナキラシケレハ
草葉忽チ朱ニ深リカクテ終ル數度ノ掛合

ニ梅酸ノ馮ヲヘカタケレハ兩陣相引ニサ
ツト引取味方ハ四名ノ堤ニ旗打立テ勢ヲ
一所ニ集ラレシ所ニ何モヲトラヌ粉骨ノ
働キヲ成シタリト見ヘテ各々少々ノ薄手
カウフヲヌ者事十ノ小牛ノ端甲ノ吹返シ
ノハツレニ矢一筋二筋カケヌトハナカリ
ケリ爰ハ地形ニ宜シカラストテ川ヲ引越
矢作ニ陣ヲソトラレケル

駿河勢敗北并御子息方御領地配分之

事

叔夜ニ入テ敵ハ井田魏魄野稻熊山ニ陣ヲ
取陣屋ノカ、リ火ハ暗タル空ノ星ノ如ク
井田ノ原ニ陣取タル東三河ノ面々一所ニ
集テ昨今軍ノ評判シケルヤウハ西三河衆
兩日ノ軍ノ躰花ヤカニシテ耳目ヲ驚ス所
也向後ハ長親公申合ヘシト田原ノ戸田ヲ
始トシテ各々寄頭シテ私言ケルヲ夜廻リ
トノヒソカニ聞テ新九郎ニ此由ヲカソト

告ケレハ新九郎何トカ思ケン乎廻リ者計
リ召連テ甲山ノ陣所見ヘ歸ルヘシトテ打
出ケルカ甲山ヘハ行スシテ引取ケル東三
河衆此由ヲ聞テ紫ノ外ナル次第ヤトテツ
、イテ引退ケレハ駿河遠州ノ勢叔ハ新九
郎ニ出シ按レケルカトテ残スソナニ成テ
スゴ、ト引退ク去程ニ矢作ノ陣場ヨリ
見渡セハ敵陣ノ篝火一度ニ消矢ケレハ叔
コソ敵ハ逃行ソ追掛テ討ト云テ、ニ跡ヲ

シノヒテ追カケレハ生田藤川ヲスキ山中
ニテ追著散々ニ戦テ又爰ニテ七首數多打
取ケル長親公今度ノ御合戦ハ徧ニ萬死ヲ
出テ一生ノ御利運目出度シテ安祥城ヘソ
飯陣有ケル

傳云伊勢新九郎夜中ニ恐出落行ケル子
細ハ東三河衆一所ニ集テ啗キケル鮓ハ
如何様敵ト一味同心ト見ユ然ハ必定岡
壽ノ勢ヲ引入岩津安祥ノ勢ト三方ヨリ

討テ掛ルヘシ兩日ノ合戦味方大半討レ
其上手負セ多ケレハ明日ノ合戦ハ甚ノ
アヤウシ唯事ノ急ナラサル先ニ立心中
ニ爰断シテ早速引取ケルトカヤ

又云山中ノ里ニ血洗池ト云有駿河遠州
ノ勢引退ク時篳追掛合戦ノ後此池ニテ
釵戟ノ血ヲ洗ヒシトヤ

又云其時ノ岡壽ノ城主ハ二代目松平彈
正左工門尉也

又云岡崎ノ東南ニ大西村有山上ニ千人塚ト云有古來ヨリ北条乱ノ首塚ナリト所ノモノ云傳フ然ハ右ノ合戦ニ取タル首ヲ爰ニ埋メルナラシ其亡靈ノ盆祭リニヤ所ノ者トモ明シ松數千持上リテ此塚ノ廻リニテ燃ス故ニ萬燈山共云彼戰場ノ篝火今見ルヤウニコソ
其後御二男内膳殿櫻井城
三男甚太郎殿 青野城

松平勘四郎殿 藤井城

松平右京殿 福釜城

信忠公ニハ安祥城ヲ讓ラセ給ヒ

天文十三甲辰年八月三日御逝去御法名ヲハ掉舟院殿一閑道闍大居士トノ申奉ル也
松平御六代

世良田左京亮信忠公依不政早御隱居之事

信忠公ハ初ハ竹千代九後ニ次郎三郎其後

左京亮ト申奉ル是ハ御代々替リ御仁愛モ
ウスノ諫言ヲモ入サセ給ハサルニ依テ御
一門中御家人ニ至迄御親シク淺クシテ諸
人思ヒ付奉ラズ内膳殿ヲ守立御代ヲ持セ
申ヘシト云御譜代多シテ御家門ニツニワ
レテ一和セサレハ其中ノ棟梁ノ者ヲ御手
討ニセラレケレトモ御行跡ヲ改メラレサ
レルニ依テ心アル古老者共一所ニアツマ
リ叫キケルハ鳴中此君御先代ニ打ツ、キ

キ良將ニマシマサハ程ナク近國ハ御手ニ
入ヘキトノヲ此御代ニ至テ御家ノ御奏興
中ナルミスル事ノ口借サヨト凡彈シテ誑
シ申由上聞ニ達シケレハ難治ノ事ト思召
御二男藏人殿ニハ合教木ノ城ヲユスリ三
男十郎三郎殿ニハ三木ノ城ヲ渡サレ次郎
三郎清康公ニ御代ヲ讓ラセ給其身ハ大濱
ノ郷へ御隠居トソ聞ヘケル

沖ノ島辨才天へ御參詣之事

或時信忠公ノ御門番所へ其形ヲ此界ノ者
トモ見へヌ異人忽然ト來テ服指一腰ヲ出
シテ是ヲ御内ノ魔徒ホムノ吉田八十郎ニ渡シ
テ給ハレト言捨テ立歸ルヲ見レハ青苔ノ
如キナル物ニテ顔ヲ隱シ衣襟ハシト、
ニ濡レタル風情怪敷覺へケレハ門番ノ者
慕ヒテ伺ヒケルニ大濱ノ磯邊ヲツタへ海
上ヲ行事平地ヲ踏カ如クニ五六町カ程ハ
東南ニ去カト見へテ行方知レス成ニケレ

ハ早速其服指ヲ持參シ信忠公へ此由ヲ申
上レハカノ腰差ヲ教テ御覽スルニ鞘ニハ
蟬敷ヒシト取付其身ハ無双ノ古身ナリ不
思儀ニ思召吉田八十郎ヲ召汝カ身ノ上ニ
是ニ付テ思ヒ合スル事ハナキカト御尋ア
レハ八十郎畏テ僕カ父母此以前吉良庄吉
田郷ニ住セシ時子ノナキ事ヲ悲ヒ幡豆沖
島辨才天ニ祈テ靈夢ヲ蒙リ某ヲセウケタ
リト義リ其冥加ヲ存シ毎日彼島ノ方角ニ

向ヒテ禮儀ヲナシテ候若シ其感應ニ依テ
孤ヲ憐給ヒ水神ヲ使トシテ彼神ヨリ靈釵
ヲ與ラレ候哉ラント歡喜ノ淚ヲ流シテ申
上レハ誠ニ前代未聞ノ珍事ナリト云神明
ノ不測ナリ然ハ御遊覽ノ為カク、御參
詣アルベシトテ則八十郎召連小船ニ掉サ
シテ沖島辨戈天ヘソ詣サセ給ヒケル詠ニ
アマル境地渺茫タル蒼波ノ中ニ孤島峙テ
テ石巖險高ノ見ヘ渡ル氣色ハ唐シ八境十

景ナト云所ニ是ニハイカテカ増ルヘシ言
フニ言ハレス絶ホト壘モ筆ヲ捨ヌヘシ古松枝
ヲタレ老樹葉ヲ敷物フリタル宮居ノ様仙
境ニ至ルカト疑ハル宮前ニ於テ御祈誓ア
リテ其夜ハソコニ通夜申サレサ給フ松吹
風ハヲトメカ鈴ノ響ヲマシ岸打ナラハキ
ネル鞞ノ音ヲソフ夜深人閑テ寂寥タルヲ
リカラ沖ノ方ヨリ光明赫奕タル十二ノ竜
燈景シトツラナリ來テ神木ノ梢ニカ、リ

ケレハ信忠公御覽ジテ誠ニ世燒季ニ及ヘ
トセ日月イマノ地ニ落スカ、ル靈類ニ至
ルマテ靈驗ヲ感シテ飯敬ヲナスソトヨイ
ハンヤ人間ニナイテヲヤ尊ミスンハアル
ヘカラスト御信心肝ニ銘シケレハ御子孫
御武運長久ノ御為トシテ御參詣アリトカ
ヤ

所々御遊覽之事

信忠公イマノ御年齢モ心カ、リシ比ヨリ

静ナル御住居ニ明シ暮シサセ給ヒケレハ
萬ニ付テ物ハヒシク闇モ馴サセ給ハサル
ニ浪ノ枕ニ起卧浦ノ塩屋ノ夕煙リヲ胸ニ
ツキ江村ノ漁火ハホノ、ト明渡ル空ニ
旅鷹ノ故郷ニカヘル見テハ其方モナツカ
シク山ホト、キスノ一声ヲ有明ノ月ソカ
ラ千賤カ早苗ノ取々ニ五月乙女ノウタウ
ナル田歌ニ御コ、口ヲナグサマレ或時ハ
沖ノ島ニ幽栖ヲタノシミ伊勢男ノ蚤ノカ

ツキスルツルシキ業ヲ御覽シテウツ方ノ
アハレハカナキ浮世ヲ觀シ釣スル翁ニイ
サナハレテ家路ニ往來シ且磯遊ヒ河邊遙
ニ御紛有テ御一生ヲ送ラレン
享錄四年卯十二月五日御逝去

安拙院殿泰孝道忠大居士

トソ御法名ヲ申奉ルナリ

松平御七代

世良田次良三郎清康公御若年ノ時先

西三河被御手入并岩崎品野兩城御攻
取之事

清康公初御名ハ竹千代元後ニ次郎三郎ト
申十三歳ニシテ御代ヲツキ給フ君ハ御先
代ニ勝レテ三徳兼備ハリ嚴威ハ天下ヲモ
隨ヘサセ給フヘキ御畧量ナレハ御家來ノ
面々悦ヒ勇ミ益々忠勤ヲハケマン然ハ御
一門中其外諸士ニ至ル迄悉ク出仕ヲツト
ム違變モノヲハ御手廻リノ勢ヲ以テ踏ツ

フサレケレハ因寄ノ松平弾正殿モ御手ヲ
入ラレ姫君安祥へ御入與有テ因寄ノ城ヲ
追セラル山中城ヲハ大久保七左工門尉謀
ヲ以テ乗取ケレハ御若年ノ時西三河ハ大
半御手ニ入ニケリ十九歳ノ御時尾島城ヲ
攻取給ヒ二十歳ノ時ニ尾州へ御発向岩寄
品野兩城ヲセメ落シ給ヒ岩寄ヲ内膳殿ニ
給ハル

正月雞旦御瑞夢并御夢合之事

清康公正月雞旦ノ御夢ニ東方ヨリ青キ衣
着ル人來リテ一物ヲ附与シ奉ル公アヤ
シト思召ナカラ左ノ御掌ニ諸サセ給候ハ
金色ノ此文字無名指ニ移品々思召御夢ハ
覺ニケリ不思議ノ事ニ思召サレトケ檜外和尚
ニ御物語り有ケレハ支夢ニハ品々有列子
カ感應ノ夢醫ニ邪氣夢其外忘想之夢アリ
經説ニモ如夢則預トテ虚ナル事ノ譬喻ト
シ給へトモ金鼓ノ夢ハ釋尊モ見給へリ孔

子聖人ノ兩楹ノ夢是等ハ正夢トシテ瑞夢
トス是ハ日下人ト書ナレハ御威光益々盛
リニシテ御子孫天下ノ權柄ヲ掌握シ給ハ
シ必定タル御瑞夢ニソ候ハント御夢合申
サレケル早シテ東三河御手ニ入シカバカ
ノ瑞夢ノ判断ノ奇妙ナリシ事ヲ御感アリ
テ彼和尚閻基トシテ湍珠山龍海院ヲ御建
立アリ寺領ヲ寄附セサセ給フケル

東三河宇利城御攻落旨

並松平右京殿討死之事

東三河宇利ノ熊谷カ城ヲ攻ラレベシトテ
西三河八千余ノ勢ヲ引卒シ岡崎ヲ打立宇
利郷ヨリ二里前ニ陣ヲ取給ヘハ野田城主
ノ菅沼新八郎御味方ニ馳着御目見ヘアリ
ケレハ清康公兼テ御使者ヲ以テ仰セケル
所早速ノ参着御感有テ菅沼案内者トシテ
先陣スヘシトテ翌朝宇利郷ニ打出在家悉
ク放火シ給フ所ニ煙氣猛烈トシテ敵城ニ

覆ヒカ、ツテナヒキ給ハ清康公御覽シテ
是敵陳孤虚ニシテ味方玉相ノ瑞氣也イサ
ノヤス、メ者共トテ内膳殿右京殿十郎三
郎殿甚四郎殿新太郎殿藏人殿菅沼新八郎
ヲ向ラレ御旗本ハ搦手トシテ上ノ坂へ押
上ル近藤左近右工門右方ヨリ五歩ス、シ
テ五敵退治ノ流鎗^{カウチ}矢ヲ放テハ齋藤弾右工
門左方ヨリ七歩ス、シテ七敵退治ノ矢ヲ
射カケ、レハ是ヲ矢軍ノ初トシテ操ニセ

シテ責寄せ追手搦手城内ノ鬨音矢呼ノ聲
如何成須彌ノ八万由旬ナリトセ崩落ヘシ
聞ヘケル熊谷湍仲守大剛勇士ナレハ是ヲ
曾テ事トモセス追手ノ木戸ヲクワラリト
ヒラキ松平右京殿ノ備ヘニ向ヒ真黒ニナ
リテ打テ出無ニ無三ニ切テカ、レハ内膳
殿ハ我攻口ノ矢軍ニカ、リテ救給ハス御
一ツノ面々ハ沼田ノ畔ヲ隔ヌレハカケ廻
ラントシ給フニ時移リケル所ニ右京殿向

フ敵ニ渡リアヒ大ワラハニ成テ戦ヒ給ヒ
ケル程ニ釵戟ノ先ヨリ出ル火ハ秋天ノ電
光ニ異ナラス其勢炎然トシテ一足モ引給
ハス矢種射尽シ太刀打折テ主従七十人枕
ヲナラヘテ討死シ給ヒケル御一門之面々
并菅沼新八郎ヤウ、トシテ沼田ノ畔ヲ
渡リ越へ熊谷カ勢ニ打向ヒ追御卷ツ火花
ヲ千ラシテ戦レケル所ニ清康公搦手ノ山
ヨリ此由ヲ見ヲロシ給ヒ弦走りヲウチテ

當カミヲナシ南無三宝右京亮ヲ討セテハ
何ノ面目カアラシカケ寄テ討死セヨト采
幣ヲ取テ真先ニ打下シ給へハ諸勢我先ニ
ト追手ノ陣ニ打テカ、レ内膳殿横合ニ鐘
ヲ入敵ヲ三方ヨリ打カヨミ、チンニナレ
ト責カクレハ何カハ以テタマルへキ熊谷
カ勢過半ウタレテ殘ル勢城中ニ引入ケレ
ハ逆茂木ヲ引ヤフリ堀ノ手ニ乗ランスレ
ハ城中ヨリ大石ヲ落シカケ矢間櫓ノ上ヨ

リ鏃ヲソロヘテ散クニ射ルカ、ル所ニ菅
沼新八郎高キ所ニ打上リテ相圍ノ狼煙ヲ
上タリケレハ城内ノ士岩瀬庄右工門兼テ
菅沼ト内通ノ契約ト云且ハ清康公古主ノ
親ヲ思ヒ熊谷ニハ野心アリケレハ城ノ後
口ノ方ヨリ火ヲ掛タレハ折薛風ハ烈數吹
煙リ嵐天ヲカスノテ焼上タリ篁城ノ兵是
ニ機ヲウハ、レ巢ヲ破ラレタル梁上ノ窮
鼠逸猫ノ前ニ踊リ出ルカ如クムラ、ト

打テカ、ル所ヲ飛カ、リテ突留切伏ケル
所ニ打モラサレテ八方へ逃散ケリ勢兵ニ
マキレテ熊谷備仲守死生シラスニ成ニケ
リ今度ノ軍御勝利ニ成シカトモ右京殿御
討死福ニ残念不淺思召ケレハ因奇へ御飯
陣ノ後諸勢ノ中ニ於テ清康公内膳殿向ヒ
テ仰ラレケルハ此度ノ戰場ニテ右京亮ヲ
ハ目前ニウタセ見殺シニシ給ヒケル様鮓
ハ逆心ノ働カ但シハ臆病ノ至リカ弓箭八

幡七照覽有拙者杯ハ向後ニ於テ七一呀ヲ
目前ニ討セテ見物スル事ハアルマシト甚
ク怒ル脚及眼ニ脚淚ヲウカヘ給ヒケレハ
内膳殿セトカウノ御返卷ニ及ハス赤面シ
テ座ヲ立上野城ニ飯ヲレケル

東三河吉田城御攻并田原降参之事

其頃東三河ヲハ吉田城主牧野傳藏カ持メ
リシニ清康公東三河へ脚働キ省ヘキトテ
八千余ノ人數ヲ引卒シ脚一門中固寄ヲ立

赤坂ニ御陣ヲ取ラレ先手ヲ押下シ下地邊
ヲ放火シ給ヘハ吉田城ヨリ是ヲ見テ東三
河ヲ清康ニトラル、カ西三河ヲ此方へ斬
取カ有無ノ合戦今日ニアリト大舟ニ取乗
吉田ヲ打越其船ヲ押流シテ宵水ノ陣ヲ張
鶴翼ニ備テ押カ、ル味方はヲ見テ魚鱗ニ
打テ掛リ下地是ヲ中ニ滿テ矢種ヲ射盡ケ
レハ釵戟ヲフリテ相掛リニカ、リ嘆キ呼
テ戦ヲリ敵ノ大将傳藏ハ傳次新次新藏ト

テ三人兄弟アリケルカイツレモ思ヒ定シ
軍ナレハ諸卒志ヲ一ツニシテ議擬セス長
煙リヲ立テ釣ニ白沫ヲカマセテキビシク
打廻リケレハ味方ノ先手少々色メキ立テ
見ヘケル所ニ清康公采幣打フリ御旗本備
ヘテ崩シ敵ノ真中ニカケ入ントシ給ヘハ
人々御馬ノクツハニ取付引トメ奉ル大將
御眼ヲイラ、ケ御長刀ニテ甲ノ真向ヲシ
タ、カ打テ御鎧ヲ蹴放シテカケ出シ給フ

内膳殿ハ歎味方ニ見知ラレシトヤ思召ケ
ン指物緒ノ竿付ノ乳ヲサラリト切拂ヒ横
手斗リノ乳ヲ残シ松風ニヒルカヘシサン
サメカシテ懸給フ諸卒此御面殿ノ御勢ヒ
ヲ見ルヨリモ勇氣ヲ励マシ我先ニト打テ
掛レリ西北ニ掛廻リ東南ニ追ナヒケ火出
ル程ニ戦テ短兵急ニトリヒキ敵ヲ一マク
リニマクリ付吉田川ニ追込水ニ溺レタ、
ヨフ所ヲ池ノ魚ヲツクガ如ク射取突伏

セ悉ク首ヲ取中ニモ大将傳藏カ首ヲ取柴
田中務是ヲ討取其第傳次新次新藏ヲモ川
中ニシテ打上タリケル夫ヨリ上ノ瀬ヲ打
廻リ吉田川ヲ一文字ニ架渡シ上ルヒト吉
田城へ押寄テ関ヲ三度上タリケレハ城中
ノ雜兵トモ取物モ取アヘス右往左往ト逃
タリケル去程ニ清康公吉田城ヲ架取給ヒ
直ニ田原表へ登向シ給シ所ニ戸田旗ヲ卷
降参ニ出ケレハ御宥免有テ吉田ニ引取十

日御陣ニ居ラレケル其間ニ山家三方作平
長篠田峯牛久保設樂西郷ニ連木伊奈西ノ
郡ノ面々野田ノ菅沼新八郎ヲ以テ申入悉
ク降参シテ吉田ノ御陣ニ出仕シテ御旗本
ニテ属シケル清康公御満足不斜岡崎ニ御
歸陣有テ後安祥ノ三郎清康公ト申テ諸国
ニ御威勢カクレナシ

宗長法師為宗匠御連歌御興行之事

清康公弓馬ノ藝ニ長シサセ給フ外詩歌ノ

道迄モ御心ヲ寄ラレケレハ酔ヲス、ムル
春ノ花モ千リ過夏ノ日ノ長キ御連勺蒼蠅
ハタモトヲ打テ午睦ヲ妨ケ溽暑タヘガタ
カリケレハイザ、ラバ衆子明眼寺ニ行テ
御涼アルヘシトテ連歌師宗長ヲ相具セラ
レ佛前ニ御礼儀有ハ亭坊兼テ用意シタリ
ケン庭上ノ白砂ニ水ウタセ掃除シテ傍ノ
松ノ枝タレ葉ノシゲリタル其陰ニ戸板ヲ
敷ナラベ敷皮毛毳花莖ヲマフケテ招待シ

奉レハ宗長并ニ亭坊モ其上ニ列坐セラレ
タリ幸ナル哉松陰納涼風徐ニ吹来リテ御
袖ヲヒルガヘセハ奈良ノ小川ノ夕暮モ此
涼シサニハヨモマサルベシナト御感有テ
御機嫌スクレテ見ヘサセ給庭前ノ草花ヲ
詠ヤリテ

トエナツノ庭ニ塵ナキ心カナ宗長
清康公再三御感吟有テ御服匂

松モ木高キ風ノス、シ、サ

即千宗長執筆ス亭坊秀蓮第三

ホト、キス有明ノ月ニ声ハシテ

夫ヨリ連衆召集ラレ百韻連歌御興行アリ
毎勺御秀逸ナル御付合骨ノ御風体ノミ
ニシテ御拳勺目出度納リケレハ亭坊種々
饗應シ奉リケレハ晚景ニ架シテ御歸城ナ
リ宗長法師藜杖ヲ携テ道スカラ大和歌ノ
御ハナシ有ケルトカヤ其時ノ御硯箱并ニ
御懷帋明眼寺ノ什物トシテ今現ニアリト

カヤ誠ニ其御立ハ過シ昔ニ成ヌレト御形
ミハトバマリテ硯ノ壽ノナガキ幾代ヲ数
ヘ奉ラントゾヲホユル

於御城御能之節諸士見物之事

御城ニ於テ御能アリシ時清康公ハ御廣縁
ニテ御覽アリ御一門方ハ白砂ニ疊ヲシカ
セ其上ニシテ御見物アリケル所ニ松平内
膳殿イマタ御出ナカリシニ其棧敷ノ端ニ
御近習衆何トナク腰ヲカケ並居ケレハ内

膳殿御出有テ御言葉アラ、追立給フニ
ヨツテ諸傍輩ノ面前ニテ耻カキタリトヤ
思ヒケン遂ニ其坐ヲ立サラズ扱御能終ケ
レハ公ノ御前へ彼者共ヲ召出サレ汝等ハ
父祖代々度々戰場ニ粉骨ノ働ヲナシ忠勤
ヲ致トイヘトモ相番ノ所領ヲ宛行フ事モ
ナク不便ノ事トコソ思慮ニ先刻内膳殿情
ナケレハ放言シテ汝等ニ耻見セラレシ事
本意ニ非ス所詮我等戦シテ堪忍スヘシト

仰ラレケルハ忝御意ノ御一言ナリトテニ
ナ、感涙ヲナカシケリ此由ヲ内膳殿御
不便ニ思召ケル其上前廬右京殿御討死ア
リシ時公ノ仰セラレシ御言ヲ遺言ニヤ思
ハレケン其後利欲ニメテ、織田弾正ニ御
一味有テ御謀反ヲ起サレケル誠ニ意合則
ナレハ胡越モ昆第トナル由余子藏カイニ
シヘ志不合則ハ骨肉モ讎敵トナル朱象管
蔡カタメシ今爰ニ思ヒ知ラレケリ

尾州森山御出張并松平内膳殿御謀反
之事

附清康公不慮御横死之事

去程ニ甲州武田信虎近年ニ駿州遠州へ
向申へキマ、御加勢ヲ頼之存ルノ由使者
ヲ以テ申越ル向後ハ仰セ合サルヘキノ旨
御返答アリ又尾州森山城主織田三良ヨリ
モ御手代ヲ引申へクマ、羨濃へ御働有へ
キ由委細申越レケレハサテニ御發向有へ

シトテ壹万餘ノ人数ヲ引卒シ御一門中ヲ
御先手トシテ段々ニ備ヲ立旗幟吹馬印ヲ
風ニヒルガヘシ螺鐘太鼓ヲ以テ進退ヲナ
シ路次ノ行粧花ヤカニ岡崎ヲ御進發其日
ハ岩寄ニ御陣ヲ召レ明レハ森山御着陣ア
ル兼々仰セ合サレル羨濃三人ノ衆伊賀守
氏家ト專稻葉伊豫守方へモ是迄御出陣ノ
由仰達セラル織田正清須ニ在城アリケ
レ共是ヲ事トモシ給ハス、ホノマシコタへ打散

テ在々ヲ放火シ織田三郎ト面手ニ分ケテ
近日養濃路へ打越ルベキ御日限モ極リケ
ルニ岡崎ヨリ飛脚到来シテ上野松平内膳
殿年来遺恨ヲサシハサニ今度ノ御留守ヲ
幸トシテ御逆心ヲ企ラレ岡崎ヲ攻ラルベ
キ御支度アリ其上織田彈正ト仰セ合サレ
候由風聞有急ヲ告来リケレハ清康公此旨
聞召届ラレサラハ是ヨリ上野ノ城へ押掛
即時ニ踏落シ其後織田彈正ヲ退治セシメ

養濃尾張ヲ打隨ンニ何ノ難キ事アラント
打突ハセ給ヒテ少モ騷キ給フ御氣色モナ
カリケル所ニ清康公御運命盡サセ給ヘキ
時節ヤ到来シタリケン御陣中ニテ御馬ハ
ナレ人音高ク騷動シケル折柄阿部弥七郎
タチマチ狂亂シテ清康公何心モナク居サ
セ給フ所ヲ御後口ヨリアヘナク討奉リケ
レハ植村新六郎是ヲ見テ弥七郎ヲ即坐ニ
切トムル御家来人々アキレハテ、二世ノ

御供申サント我モ、ト押膚脱既ニ腹ヲ
切ントス植村新六郎オシト、メケルハ各
是ニテ切腹シ給ハ、若公ヲハ誰アリテ守
リ奉ラン迎モ一命ハ主君ニ拖置タル故ナ
レハ如何様近日織田彈正圓峯へ押寄シ其
時花ヤカニ軍シテ若君ノ御為ニ骸ヲ戰場
ニサラサレヨ此儀尤至極セリト諸勢一同
ニ森山ヲ打立テ岡崎へソ引取ケル嗚呼此
日如何成日ソヤ天文二年癸巳十二月五日

可惜御命三十五歳ニテ逝去シ給ヒケル御
法名善徳院殿年叟道甫大居士ト申奉リケ
ル清康公御長壽ニマシマサハ天下ハ御掌
ニ入ルヘキヲ横難ノ災ニテ早世アリ残念
ト云モ猶オ口カ成事ナリ

傳云御祖代々御墳墓顕然タリ清康公ハ
尾州森山ニテカク横死有其折節御一門
ノ内膳殿ハ御謀叛若君廣忠公ハ御幼稚
ニシテ諸方動乱ノ最中ナレハ稻熊村ト

岡崎境ノ山上ニ御死骸ヲ埋奉リシ其墓
松近年迄三郎様松ト申傳テアリシカ御
勅當ノ岡崎三郎公ノ御墓ヲトナヘテ語
リテ名大將ノ古跡世ニ知ル人ナキユソ
カナシケレ今ノ隨念寺山是ナリ次郎三
郎清康公御尊影今ニ彼寺ニアリ

松平御八代

井田原合戦之事

廣忠公初ノ御名ハ千松丸後ニ竹千代丸ト

申奉ル御年十三歳ニテ清康公ニオクレサ
セ給ヒイマク百ヶ日モ過サルニ尾州ノ織
田彈正多勢ヲ引率シ三州ニ打出大樹寺ニ
陣ヲ取テ岡崎城ヲ攻ント又去程ニ岡崎ニ
ハ上野城^{ホウノ}主松平内膳正信貞反逆ニ依御一
門中モ御譜代輩モ大概ハ信貞方ニ引取レ
ケレハ少々残留テ若君ニ付隨ヒ奉ル人々
ハ霜雪ヲ経レトモ貞松ノ色ヲ変セサルカ
如キノ一騎當千ノ勇士ナレハ敵多勢ヲ以

テ寄ルト聞共少シモ臆シタル躰モナク若
君ニ今生ノ御殿ヲ乞申テ岡寄ヲ打出テ伊
賀八幡ノ鳥井ノ前ニテ是ヲ限りノ禮儀ヲ
ナシ死ヲ一途ニ思定シ其氣色獅子奮迅ノ
勢ヒモ是ニハイカテマサルヘシ敵陣ヲ見
渡セハ八千ノ人數ヲ井田ノ上野ニ四千井
田ノ下田ニ四千両手ニ分ツテ旗幟ヲ風ニ
ヒルカヘシテソ備ヘタリ味方ニハヤサシ
クモ八百ノ人數ヲ上野ノ方四百下田ノ方

へ四百両手ニ分ケテハセ向フ心ノ程エソ
猛勇ナレ先井田ノ上野ニ向フタル四百ノ
勢迄モ戰場スヘキ敵ナラネハ何カハ以テ
議擬スヘキ義ヲ金石ニ守リ命ヲ塵芥ニ比
シテ敵ノムラカリタル真中ニ一同ニトツ
トカケ入打ヤフリテハカケ廻リ取テカヘ
シテハ切崩シテハ欠ヌケ反タル太刀ヲフ
ミ直シテハ打テ廻リ黒煙リヲ立戦ヒケリ
扱又井田ノ下田ノ方ニ向ヒタル四百勢森

山ヲ返リシヨリ捨切タル一命ナレハ我サ
キニトオメヒテ掛ル所ニ礮見出来助トテ
車ニ馴タル老剛ノモノ諸勢ニ向テ申ケル
ハアマリハヤリテ鑓ヲ入レハ肝心ノ物際
ニ勢カ抜ル者ノ大軍ノ方ヨリ鑓ヲ入サセ
テ待請テ拍子ヲ揃テ根強ク突テカ、レ若
者共ト架タル駒ノ勇メルカ手綱ヲシツカ
トヒカエレハ林藤五郎阿部大藏八国甚六
郎寛圖書上村新六郎大原左近右衛門島田

彈正同出雲守大久保新八郎ヲ始トシテ百
五十騎ノ者共田ノ中ニ駒ヲ架捨タリカ千
夕チノ兵共ハ夫ヨリ十四五間ス、ンテ傍
へ一面ニ備ヘテ各鑓長カヲ小眼ニ開込前
膝折敷テ扣ヘタリ其機勢決然トシテ鉄石
ノ如クニ見ヘタリケリ敵業ノ如ク備ヲ崩
シテ突テカ、ル所ヲ味方ノ馬上ノ兵鞍ア
ブミヲ合セテ敵ノ真中ニ懸入ハカ千立ノ
兵一同ニトツト打テカ、リ蛛手角繩十文

字ハ花形ニカケ廻リ息ヲモツカス散々ニ
大勢ヲ西北ニ追テラセハ敵方ハ案内知ラ
ス沼田ニ馬ヲ乗カケ引トモアカラス打ト
モ行ス歩立ノ兵ハ深泥ニ足ヲ取レ働モア
ヘスアタリモ咳唾ニ黏サレタル蒼蠅ニ似
タリ味方ノ勢得タリヤカシコシト畔ヲ傳
ヒ畔ニソウテ馳寄テ射殺シ突殺二十餘人
ヲ切捨シ井田ノ上野ニ打上リテ見レハ敵
九百人打取味方貳百五十人打死シテ殘百

五十人ノ兵汗水ニナリテ命限りニ切詰所
ヘ一方ノ敵ヲハ早速ニ追散ラシテ聲々ニ
呼ハリテ横合ニ突テ掛レハ敵是ニ僻易シ
テ見ヘケリ所ニ伊賀八幡ノ方ヨリ白羽ノ
矢虚空ニ鳴ヒ、キテ敵陣ノ上ニ亂レ落レ
ハ味方不思議ノ思ヲナシ南無八幡ト一同
ニ唱ヘテ打テカ、レハ寄手ノ大勢トツト
崩レテ敗北シ倉前上ノ里ノ方ヘ引取ケリ
若武者共イサミス、ンテサラハ河ヲ半渡

ス河ヲ追カケテ大将ヲ討取ラント申ケレ
ハ礮貝聞テイヤ、夫ハ不覺ナリ河岸ニ
追詰ラレ窮荒カヘツテ猫ヲ噬カ如クニ取
テカヘシテ戰ハ、ツカレタル小勢必定ア
ヤマチ大勢ヲハ追散ラシ此上何ソ強テ十
全ノ勝利ヲムサホルベケンヤトテ先伊賀
八幡ノ御社迄引取テ各神前ニ詣抑今度ノ
戰場ニ於テ靈神ノオウゴニヨラスンハ争
カ万死ノ困出テ一生ノ利運ヲ開カンヤト

禮機ノ頭ヲカタフケ庭前ニナニ居テ大息
ヲツキ流シ勞ヲ休ムル其間ニ敵悉ク河ヲ
涉リテ尾州ヲサシテ引取ハ味方モ岡寄ニ
歸陣シテ若君ノ御前ニ参列シテ二度生前
ノ對顔ヲナシ奉リ御悦ハ限リナシ

廣忠公御幼少之節御沈落他国御蟄居

之事

附御成長之後茂呂之城御入之事

竹千代君御改名有テ次郎三郎廣忠公ト申

テ御近從輩御譜代之衆イツキカシツキ奉
所ニ松平内膳信貞計ヲメクラシ織田彈正
ヲ岡崎ノ城ヘ曳入ヘキ人有由其聞ヘ有ケ
レハ古老ノ面々評定シテ先一日廣忠公ヲ
何方ヘ成共忍ハセ奉リ御成長之後何ケ様
ニモ計畧ヲ以テ御本懐ヲ遂サシメ奉ルヘ
シトテ事廣々御家人中ニモ無披露ヒソカ
ニ落シ奉リケル去程ニ廣忠公阿部大藏其
外六人ノ者共御供申住別給ヒシ岡崎ヲマ

ク夜モフカキニ忍ヒ出サセ給ヒツ、ヤウ
、トシテ伊勢山田ニ着セシ給ヒ春木カ
宅ニ木隠レテ螢雪ノ窓ニ向ヒ御手習御学
問ヲ遊サレ神路山ニ年月ヲカサ子五十鈴
川ニ時日移リテ御齡十五歳ニナラセ給春
ノ比ニ見カ浦ノ婦多度御本因安堵ノ計畧
ヲメクラサン為阿部大藏駿河ヘ御供仕リ
廣忠公今川殿ニ御對面アリ萬端頼ニ思召
サル由仰入ラレハ今川殿モ御如在アルマ

シキト有テ則人数ヲ加勢シテ三州吉良庄
茂呂城ニ移サレケル岡崎ニ残居シ御譜代
ノ輩此ヨシヲ聞テ悦ブ事ハカキリナシ

信貞茂呂城攻之事

上野ノ松平内膳信貞此由ヲ聞テ多勢率茂
呂城ニ押寄閔ヲ三度上ラル大久保新八郎
一陣ニ進ミ出テ大音上テ名乗ケルハ古ヘ
ハ廣忠ノ家来今ハ信貞ノ家臣大久保新八
郎ガ弓勢ノ程請テ見ヨト云終ニ貳人張ニ

十三束三ツ伏キリ、ト引シホリ暫クカ
タメテヒヤウトハナチ矢叫シテソ立タリ
ケル其矢城中ノ玄閤ノ柱ニハツシトアタ
ルヲ見レハ一通ノ矢文ナリ阿部大藏是ヲ
取テ廣忠公ノ上覽ニ入即御意ヲ蒙リテ御
返書ヲ認テ門櫓ニ上テ大音上一陣ニ進タ
ルハ大久保新八ト見ルハ僻目カ君ニ仕ヘ
奉リテニ心ナキ阿部大藏カ射タル矢ヲ請
トメテ鏃ノ鍊ヲ試ト廣言吐テヨツ引ハナ

ツ矢カ新八郎カ草摺ハツシトアタレハ其
矢ヲ取テ空穂ニ納メ矢疵蒙リタル風情ニ
テ引退又抑今度ノ寄手ハ皆以御一門中或
ハ御譜代ノ侍ナレハ遠天ノ三射カケテ日
ヲ暮シケルホトニ廣忠公門ヲ開キテ打出
給ヘハ寄手ノ勢是ヲ幸ヒトシテ八方へ逃
散ケレハ内膳信貞安ニ相違シテ上野ノ城
ヘソ引歸ル

廣忠公岡崎ノ城へ御歸入御安座之事

大久保新八郎宿所ニ歸テ舍第甚四郎称三
郎兩人ヲ招キ一所ニ集リ頭ヲ寄テ廣忠公
ヨリノ御書ヲ取出シ三度頂戴シツ、レン
テ讀上奉レハ

今度以テ前文申越候趣得其意感悦不
淺然ハ早速励孔明之忠勤而廻范蠡之
奇計者也ト

遊ハシタリ兩人ノ者共此由ヲ承リサテハ
急キテ其儀相催スヘシトテ林藤五郎成瀬

又太郎八國甚四郎大原左近右衛門等ニ相
談セシニ何モ尤ト同意ス松平藏人殿ニ此
由申上ル是モ早速御領掌有テ仰セケルハ
幸ニ比日有馬湯治ノ儀信貞へ相達シ置タ
ル故左モアラハ急ニ登足スへキ間其留守
ノ中ニ相計ラヘト有テ其翌日御湯治ノ夕
メ岡寄ヲ立出給ヒケル叔茂呂城へハ御迎
ヲ遣シ大久保新八郎兄弟一門打連テ御城
ノ御番ニ上リ御門ノ鑰ハ藏人殿仰セ置レ

シ事ナレハ御局ニ申テ安々ト請取今ヤ置
シト相待所ニ廣忠公御着ト聞トヒトシク
大門ヲ開キ引入奉リ二三ノ丸ヲハ此儀同
心ノモノトモニカタメサセ信貞方ノ城番
ノ諸士ヲ悉ク打取廣忠公ヲ本丸ニ移シ奉
リ四方ノ門戸ヲ堅固ニ守テ夜ヲ明シケル
處ニ御城下ノ侍此由ヲ聞シナ、喜悅ノ
眉ヲヒラキ早速ニ登城シ御一門中モ御悅
ヒ淺カラス皆々御出仕アレト御威勢日々

ニ盛リニナリ給ヘハ内膳殿モ御侘言有テ
出仕セラル

廣忠公御政道之事

廣忠公ハ寛仁大度ニオワシマシ御家中御
領内ニ至ル迄御政道正シク萬ニ付テ御ア
ワレミフカ、リケリ公近年他国ニオワシ
マシケル其間ニ御譜代ノ侍多クハ二君ニ
事ヘナン事ヲハ千澗明カ跡ヲ追テ或ハ孤
村ニ居ヲトシ或陋巷庵ヲムスンテ僕後節

ヲ訴フレハ藺ニ出テ趣成シ農人時ヲ告レ
ハ畔ニ立テ業ヲ励シテ生活ヲイトナミケ
リ或時御鷹野ニ出サセ給ヒケル折カラ近
藤傳次左衛門田面ニ有ケルヲ御覽シテ御
前ニ召出仰ラレケルハ汝等當家ニ代々傳
ハリテ一命ヲ抛テハタラキ數度ノ忠節ヲ
致セシニ遂ニ一廬ノ所領ヲモアタヘサル
故ニ其如ク農業ヲナシテ妻子ヲ扶持シ身
命ヲ保テ奉公ヲツトムル条不便ノ至ナ

リ任ナガラ一隣国ヲ切弘メテ相應ノ恩賞
ヲ与ヘント思モ汝ラガ如キ忠貞ノモノヲ
持タルカ故ナリト有テ御落涙ニ及給ヒケ
レハ誠ニ千金ノ賜ニカヘサルハ一言ナリ
トテ御譜代ノ輩モ益忠勤ヲハケマシケル
上野合戦之事

上野ノ城主松平内膳正信貞潜ニ勢ヲ催シ
岡崎城夜討ニセラルヘキ人トアルヨシ矢
作ノ島田彈正方ヨリ注進スル故サラハ此

方ヨリ逆寄シテ上野ヲ攻ラルヘシトテ早
速御人数ヲ集メラレ御先手トシテハセ向
フ人々

酒井將監	同与四郎	石川安藝守	林藤五郎
成瀬又太郎	阿部大藏助	大久保新八郎	同甚四郎
同弥三郎	内藤弥次右衛門	大原左近右衛門	鳥井又四郎
安藤太郎左衛門	牧野新助	平岩七之助	土屋甚助
中根藤藏	三浦平三郎	本田小市郎	太田善太夫
加藤加之介	中川太郎兵衛	高木九之助	五月山善四郎

本田吉左三門

倉橋惣三郎

榊原撰津守

同傳藏

安達左馬之介

戸田三郎兵衛

岡部慶宅

天野清右三門

笈圖書

青木越後守等ヲ始トシ

四百余人

御旗本ニハ御一門ノ歴々御譜代ノ面々三
百余人都合其勢七百人ヲ引率シ爾等ヲ
打立矢作川ノ上瀬ヲ渡シテ上野表へ御出
張リアリシ所ヲ上野ノ城ニハ佐久間將監
三宅三左衛門同庄左衛門鈴木新左衛門是
等ヲ始トシテ衆徒ノ一門從類五百余人城

内ノ廣久手原ニ打出テ互ニ矢合ノ流鏑射
違ヒシ、ト鎧ヲ合セ敵味方入亂四方ハ
面ニ切テ廻リケル程ニ歩立ノ太刀打火花
ヲ散ラシテ戦ヒ馬上ノ掛合黒煙リヲ立テ
或ハ推並テ組テ落勝負ヲ遂ル者モアリ或
ハ疊カケテ散々ニ切ムスフ飛ヒ込シテ雌
雄ヲ決スル者モアリ爰ニ金田惣八御旗本
ニ有ケルガ阜ノ如クニ掛出シ猛勢ニ向テ
驚クマタカノ小鳥ウツカ如クニ打廻リ余

リニ強ク深入シ城近キ所ノ芝土手ノ邊ニ
テ釵戟打レテ討死ス掛リケル所ニ御旗本
ノ歩立ノ士ニ熊倉段右衛門ト云大カノ剛
ノ者日比ノ勇カ今度ノ用ニ立スシハイツ
ノ時ヲ期スヘキト廻リハ寸長サ貳間ノ樞
木ニテケツリタル棒ヲ麻⁺カラナトヲ振カ
如クカル、ト打フリテムラガリヒカヘ
タル敵ノ真中ニ懸入機ニ打ニ丁々打テ廻
リケル程ニ此棒先ニ振ル、モノ甲ノマツ

カウ微塵ニ打碎レ首ノ骨髄ノ中ニヒシ
キ込テ死スル者数ヲ知ラスアマリニ強勵
テ其棒三段ニ打ケレハ手元ニ殘ル棒ノ折
ヲ向ヘヒラリト投捨テ傍ヲ見レハ根元迄
尺廻リ斗ニテ鑢ノ柄ノ如ニ立延タル杉ノ
木有ケルニ壹リ懸テ取付後ニエイト掛聲
シテ飛退ハホツシト打レテ倒レルヲ其棒
ヲフニ折ユラリト取テ肩ニカケ幸ニ取カ
ヘノ棒コソ人トテ透間モナク歩ニ寄大勢

ノ敵ヲカシユニ村々ト追ナヒケ爰ニハラ
、ト追詰テ磯打波ノ如ク五人三人連打
ニ打ナクリ馳マカレハ敵コレニヲド口キ
立テ城中へ引籠リ矢間櫓ノ上ヨリシテ鏃
ヲ揃ヘテ筒先ヲナラベテ矢ヲ射カケ鉄炮
ヲ打カクレハ是ヲコソ云ヘケレ可惜剛者
カナトオシマヌモノハナカリケリ去程ニ
上野城ヲ稻麻竹葦ノ如ク取カコヒテ三日
三夜息ヲツカス攻ニケリ互ニ射違フ矢ハ

雨ノ如ク打カワス鉄炮ノ玉ハ霧ノ多ハシ
ルガ如ク火繩ノ火電光トヒラメキ口薬ノ
煙雲影トタナヒキ敵味方ノ関矢叫ノ音乾
坤モ崩裂大海モ反覆スルカト聞ヘタリ城
ノ傍ニ天王社其上ヨリ見入ランコトタイ
トヒテ社ヲ焼拂ケレ共味方ノ勢其焼跡高
岸ニ上テ城中ヲ見下シ鉄炮ヲ打入矢ヲ射
込テ責ケレハ信貞是ニアクミアツカヒヲ
入テ詫言シ城ヲ明渡シ尾州岩崎ニ立退ケ

レハ酒井將監ヲ城ニ居オカレ岡崎ニ御歸
陣アリシナリ

若君御誕生之事

廣忠公ノ御臺所ハ苜谷ノ水野右衛門太夫
忠政ノ御息女ニテオハシマス公常々御物
語リノ次ニ宣ヒケルハ我知稚ノ時孤トナ
リテ艱難ヲ經タルニ付テモ家相續ノ為ニ
ハ男子ヲ早ク持タキモノナリトアリ實モ
御臺所ニモ御懷胎ヲ早クモカナト思召ケ

ル所ニ御血塊ノ御ナヤニ強カリシ比鳳来
寺ノ藥師如來ニ御祈願アリテ早速御平獲
有シ故御願ホドキノ為且ハ若君御誕生ノ
御祈ノ為トシテ鳳来寺詣思召タ、レ六供
ノ淨光坊秀海御道シルヘトシテ御先ニ立
御供ノ時數十人召連ラレ岡崎ヲ御出アリ
急カセ給ヘハ程モナク是ハ早鳳来寺ノ麓
ニテ候ト申セハ御輿ヨリ下リサセ給ヒ御
歩行ニテ御杖ニスカリテ萬カツラヲヨク

テノホラセ給ヘハ万俣ノケハシキニ御心
ヲイタマシメヤウ、トシテ本堂ニ着セ
給ヒ佛前ニ誓首シテ御心中ノ御祈願ニ肝
膽ヲ碎カセ給ヒ即其夜ハ御堂ノ傍ニ御通
夜篋マシ、ケレハ御経讀誦ノ聲イトタ
ウトク振鈴聲モカスカニ聞ヘテ夜フケル
俣ニ物静カナル山寺ノ住居殊勝ニ思召ツ
、ケテシハシ御マト口ニ有ケルニ本尊生
身薬師金色ノ光ヲ放テ来現アリ妙ナル御

聲ヲアケテ御臺所ニ告給ハ、母誠ノ祈願
哀憐スルニタヘス然ハ十二ノ神將ヲ交代
ニ下シツ、汝ガ子孫トナリテ天下ノ荒亂
ヲ鎮メ世ヲ恭平ニ歸シ衆生ヲ永久濟度ス
ヘシト聞ヘテ御殿立ノ寅神宮毘羅大將御
像ヲ千バメテ御臺所ノ御口ニ飛入給フト
覺セシカ御夢ハ即ニ覺ニケリ夜明レハ猶
佛前ニ祈リ申サセ給ヒテ御下向有ケル夫
ヨリ程ナク御懐胎ノ氣マシ、十月満シ

シテ天文十一年壬寅十二月廿六日ニ容貌
端正若君ヲ御誕生ナリ此君後ニ家康公ト
申奉ルナリ御成長マシマスニ隨テ御聰明
睿智ニオハシケレハ此君ノ御一代ニハ必
定天下ノ大將軍ニ備ハラセ給フヘシト誠
ニタノモシク覺ルゾ

御夢想之事并御夢合之事

若君御懷胎ノ比廣忠公ノ御夢中ニ

神々ノナガキ世絶ヲ守ルカナ

此句ヲ何トナク數返操リ返シ御詠吟アリ
シト覺ヘ有テ御夢覺メケレハ不思議ノ事
ニ思召御書留置有シ折カラ大濱ノ稱名寺
登城セラレケルニ御物語リ有ケレハ和尚
感吟シテ古語ニモ天下ハ大器ナリ人爲ヲ
以テ争フ可カラス神有テ存スルト見ヘタ
レハ神々ノ御守リアルトハ凡人ニハ候マ
シイカ様御成長ノ後名君ニテ天下ノ大將
軍タルヘキ御若君公御誕生有ヘキ御夢想

ニヤトソ

ツ、キモヒロキ菌ノ若竹

斯暇勺ヲツラネ申テ退出セラレシカ其言
ノ如ク程ナク御男子御出産御面躰ニ大人
ノ御相ソナハラセ給ヒシ若公ニテ御慶ハ
限リナシ即御名ヲ竹千代君ト名付申サセ
給フ然ニ若公御年三歳ノ比シモ如何成思
召カ有ケン廣忠公御臺所ヲ御離別トソ聞
ヘケル御臺所ハ若君ニサエソ御名殘ハ惜

カリケル御ナミタニフシ、ツマセ給ヒシ
カ

クレ竹ノ千代モト思フミトリ子ニ

別レ行テフハ、イカニセン

一首ノ御詠歌ニ万般ノ御慶ヘヲフクメテ
立出給フ哀ナリシ御事ナリ夫ヨリ後ハ若
君ヲハ御大伯母隨念尼公御差添アリテソ
タテ申サセ給ヒケル

傳云廣忠公後ニ田原ノ城主戸田禪正ノ

御息女ヲ娶トラセ給フトナリ

三ツ木合戦之事

合歡木城主松平十郎三郎殿ハ廣忠公ニハ
御伯父ナリ藏人殿ニハ御舎弟ニテ有ケル
御病死アリテ御世継ナカリシカバ松平藏
人殿合歡木岩津跡ノ御領分ニ至迄押領シ
廣忠公ノ御領分ニハ一倍ニ過テ御人數モ
多ク御威勢日々ニ盛ニシテ雅意ヲハタラ
キ給ヘハ岡崎ノ老中評議シテ此殿後ニハ

必ス内膳殿信貞ノ如クニ御別心有ヘシ今
度駿河ノ御留守ヲ幸トシテ三木ノ城ヲ衆
取セ給ハ、可然覺候ト申上ケレハサテハ
早速押寄衆取ヘシト有テ廣忠公ハ百余ノ
人數ヲ引率シ三ツ木城ヘ押寄三度関ヲ作
矢合ノ流鏑ヲ射違ヘ鉄炮ヲ打込モニモ
ニテ攻寄給フ所ニ城中ニハ此事兼日ヨリ
聞ヘケレハ多勢ノ軍兵ヲ籠置矢間々々ヲ
押ヒラキ矢束トヒテ押亂シ兩ノ降如ク射

カケ矢倉々々ヨリ大筒コミカへ、打カ
ケ、レハ味方ノ勢モ責アクンテヒカヘル
所へ城木戸ヲクハラリト開ヒテ千五百人
風ニユラメク秋ノ野尾花カ末ヲ見ル如ク
抜ツレテ討テ出ル味方ニハ是ヲ見テ開キ
合セテ一文字ニ打テカ、レハ巴ノ字ニハ
セ廻リ縦横無窮ニ掛散ラシ土煙リヲ上テ
戦フタリサレハ甲ノ星ノ影釵戟ノ光リニ
暉テ電光ノヒラメクカ如クナリ廣忠公御

長カヲフリテ御自身御手ヲ碎カレケレハ
誰カハ以テ一足モ引へキ命ヲ限リト働ケ
ハ互ニ手負死人多カリケレハ両陣相引ニ
サツト引取暫ク息ヲ續タリケル公諸勢ニ
向テ宣ヒケルハ思ノ外ニ此城ニハ多勢董
テカ攻ニハ責ガタシ近日計畧ヲ以テ集取
へシ日モステニ暮ナントスレハ先引取へ
シト有テ岡寄サシテ引取給ヒ搦大久保甚
四郎同弥三郎召出サレ汝ハ最前三木ニ有

テ城内ノ案内ヲ知リタレハ三木ニ至リテ
何トソ計畧ヲメグラシ中根助市郎大竹源
六ヲ呼出シ内通ヲナシテ夜討ノ引入致ス
ヘシト申含メ其相談ヲナシテ来レト仰セ
付ラレケレハ大久保兄弟三木ニ参リ其邊
ノ百姓ヲ一人城中ニ入テ中根大竹兩人ヲ
呼出シ上意ノ趣ヲ申含メ歸リケレハ大竹
源六中根助市城内ノ大竹孫右衛門中根弥
太郎同甚太郎同新次郎深津弥七郎ニヒソ

カニ示シ合置テ中根助市大竹源六八岡等
ニ歸リハセ参急キ夜討ノ御人数ヲムカヘ
ラレ相圖ヲ定メ置ト申上レハ公御感悅淺
カラス早速御人数ヲスクツテ酒井石川柳
原大久保阿部成瀬八国近藤ヲ先トシテ四
百余人中根大竹ヲ案内トシテ夜討コソハ
向ハレケル掛ル所ニ大竹源六中根助市三
木ノ一族共ノ方ヘ謀畧ノ使ヲ立テ藏人殿
ハ駿河ニテ御切腹ナサレケル岡崎ヨリ討

手ヲ向ハサレル内ニ早城ヲ立退クトアリ
タ、敷申遣シケレハ中根黨者トモ并深津
弥七郎此由ヲ聞テ實シクモテナシ扱ハ主
君モナキ城ニ竈テ何カセンイサヤ立退カ
ン各イカニトヒシメキ廻レハ城中ノモノ
共アキレハテ衆儀マテ、ニシテ周章ス
ル所へ夜討ノ勢トツト押寄圍ヲ上レハ兼
テ相圖ノ事ナレハ中根黨ノ者共内ヨリ木
戸ヲ開テ夜討ノ勢ヲソ入タリケル城中ノ

諸兵氣ヲ矢ヒ取物取アヘス我先ニト散々
ニ落行ハ味方ノ勢ハ其後ニ入替リ即時ニ
城ヲ策取リケル去程ニ藏人殿駿河ヨリ歸
リ給ヘ共三木ヘ入サレハ種々御詫言アリ
ケレ共御承引ナキニ依テ以ノ外立腹シ固
寄領地ノ作毛殊ニ火久保カ田畑堀捨苜捨
様々ノアダヲナシ給ヒケル

安祥合戦之事

藏人殿在郷ニ忍出テ御坐有ケルカ御遺恨

フカク思召後ニハ織田彈正ニ便リ給ヒテ
尾州領ヲ引入三州彈正ノ手ニ入御自今モ
御本領ヲ取返シ給フヘキ計略ヲ成シ給ヒ
ケル折節安藤筑後守ハ御譜代ノ者ニテ安
祥ノ城番ノ數ニテ相誥ケル所ニ渡リ村ノ
市場ニ於テ安藤九助ト喧嘩シ双方立退ケ
ル其後九助ヲハ早速召歸サレ筑後守ハ最
前ノ次第非義タル故御免ノ儀延引ニ及ヒ
ケレハ野心ヲ存シ藏人殿ニ内意シテ安城

城無勢ノ由ヲハ尾州へ告タル故織田彈正
同三郎一千餘騎ヲ引率シ両手ニ分テ岡崎
安祥ヲ攻ルヨシ先立テ聞ヘケル程ニ岡崎
モ其用心有所ニ左ナクシテ先安祥ニテ向
ヒケル安祥ノ城番ノ者共評議シテ申ケル
ハ敵多勢ニテ向フヨシ此城近年破損ニ及
ヒ殊ニ小勢ヲ以テハ追手搦手ノ木戸タニ
モカヒ、敷者堅メカタシ引請テ戰ハ、
マハラナル此城廓一トタマリモタマルベ

カラス味方至テ小勢ナリトイヘトモ志ヲ
一ツニシテ城外ニ打テ出花ヤカニ一戦シ
テ討死セシト本多吉左衛門鳥井黨大田黨
麻生長坂服部山田浅井近藤藤堂ヲ初トシテ
二百餘人ノ兵トモ脱免ノ如ク打テ出一カ
タマリニカタマツテ一千餘騎ノ正中ニ面
モフラス一文字ニ討テ掛リ千切形ニ掛廻
リ卍字様ニ割立圓相ニ切テ廻リ黒煙リヲ
立テソ戦タル去ハ敵ノ先陣色メキ立テ引

退キ又荒手ヲ入替操ニモンテ攻戦ハ味
方過半討レテ既ニ危ク見ヘケル所ニ安城
村ノ住人ニ善惠坊トテ色黒ギ脊高キ大カ
ノ差法師有ケルカ親類ノ者共尾張勢ニ取
マカレ難儀ノ由ヲ聞ヨリ早ク搦繩ヒキ目ノ鎧
ヲ着シ同毛ノ甲ノ緒ヲシメ白緋ヒキタシテ
鉢巻トシ大友鍛冶カキタウタル四尺七寸
ノ大太刀ヲ真向ニ差カサシ電光ノ如ク馳
来リテ参レト云俣ニ大勢ノ敵ノ中へ小拍

子ヲ取テヲドリ懸ハ不懸リ散々ニ切立猛
勢ノ中ヲ千鳥カケニ切テ廻リケル程ニカ
レカ太刀先ニフル、所ノ敵甲ノ真向ヲ唐
竹破ニ割付ラレ胸中ヨリ切落サレ手履夕
ルモノハ数ヲ知ラス織田三郎是ヲ見テ且
討取々々鉄炮ヲ打掛ヨト下知スレハ打物
ワサニテ叶ハシト鉄炮ヲ揃ヘテ打掛レハ
鬼ヲ欺ク善恵坊モ蜂ノ巢ノ如ク打通サレ
田ノ畔ニヨリ拳ヲ握リ眼玉ヲ見出シテ居

スクミ死タリケルサレハ今ニ至ル迄曇夕
ル夜ニハ其畔ヨリ大ナル火ノ玉飛出テ城
ノ跡へ徘徊ス是ヲ善恵坊カ火トゾ申ケル
去程ニ織田彈正勢ヲ引分安城ノ城ヲ衆取
ケル去程ニ織田彈正暫ク在テ城ノ破損ヲ
修復シ堀ヲサラヘ近邊ノ在郷ニ打出多勢
ヲ以テ猛威ヲ振ヒ藏人殿ト心ヲ合セ松平
三左衛門殿ヲ初園崎四方ノ取手ニ有所ノ
侍酒井左衛門大原左近右衛門近藤傳次郎

等ニ逆心ヲ進メ尾州方ニ隨ヘ置織田三郎
ヲ安祥城ニ籠置去程ニ廣忠公岡崎一城ニ
ナラセ給ヒ御一分ノ御働ニテハ中々叶フ
マシケレハ駿河ノ加勢ヲ乞テ尾州勢ヲ追
拂ハ、ヤト思召御自身駿河ヘ御越有テ今
川殿ヘ加勢ヲ請給ヒケレハ人質ヲ御渡シ
アラハ其上ニテ加勢セラルヘシトノ御契
約ニテ御歸国アリ若君竹千代公イマダ六
歳ニナラセ給ヒケルヲ駿河ヘ遣ハサレケ

ルニ安祥ノ城ニ有尾州勢此由ヲ聞兼テ田
原ノ戸田ト手合シテ路次ニテ奪ヒトリ奉
リ田原ヨリ船ニ乗申尾州ヘ人質ニ取ケレ
トモ公是ヲ事トモシ給ハス尾州ヘ御隨身
ノ御氣色曾テナカリケレハ今川義元甚々
感心アリテ御加勢ヲ差越レケル駿河ニハ
臨濟寺退院ノ和尚雪濟坊ト申テ經文語録
ノ外大公カ兵書ヲソランシ孫吳カ謀計ニ
達シ血氣剛盛ノ法師武者有カレヲ大將ト

シテ駿河遠州東三河ノ人教ヲ催シ其勢已
ニ駿河ヲ立テ藤枝ニ着ク明レハ大井川ヲ
打越シ掛川ニ陣ヲ取明レハ天竜川ヲ越引
間ニ陣ヲ取翌日両手ニ分テ今切ト本坂越
ニカ、リ吉田ニ陣ヲ取明レハ赤坂ヲ過テ
藤川ニ陣ヲ取サルホドニ尾州織田彈正ハ
駿河勢打立ヌト聞テ清須ノ城ヲ登シ其日
ハ笠寺鳴海ニ陣ヲ取明レハ安祥ニ着明レ
ハ上和田ノ取手ニ移リ翌日ハ馬頭野ニ押

出シ對陣セントテ未明ニ打出ル所ニ和田
ト藤川トハ其間寺里有テ山路ヲ隔テレハ
兩陣互ニ進ンテ小豆坂ニハヒタト行合其
坂ノ峠ヲ中ニ隔テ突テ掛リ駿河勢ヲ東ノ
方ヘ追下セハ取テカヘシテ尾張勢ヲ西ヘ
追下シニ三度追ツ返シツ戰ヒシカ駿河ノ
多勢ムラ、ト山ニ取上リ一度ニトツト
打下セハ彈正ノ備ヘ足元ヘシト口ニ成テ
ハツト崩レ羽根ノ盜木迄引退駿河追カク

ル所ヲ彈正取テカヘシ火ノ出程戦ヒシカ
尾州勢手履討死多シテ上和田ニ引入ルレ
ハ駿河勢ハ藤川ヘ引取ケル彈正ハ安祥城
ヘ引退キ舎弟三郎ヲ残シ置夫ヨリ清須城
ヘ引入ケリ駿河勢モ安祥ヲハ重テ勢ヲ催
シ攻ヘシ軍勢手履多トテ先本国ヘソ引取
ケル

傳云或時廣忠公天野孫七郎ニ仰付ラレ
廣瀬ノ佐久間ヲ知畧ヲ以テ討タセラレ

其後松平三左衛門殿織田彈正ト御一味
ニテ上和田ノ取手ニ居給ヒシヲ窺圖書
ニ仰付ラレ夜中々々ニ忍入テ討取ナリ
又云小豆坂ニ於テ織田彈正羽根村敗北セ
シニ返シノ合戦ノ時彈正ハ安祥迄引退
キ駿河勢ハ小豆坂ニフツ留リト見ヘテ
小豆坂ノ北ノ谷合ニ駿河ノ軍士鏝洗ノ
池アリ去ハ其比遠州ノ賤女共カ麥ツキ
ウタニ彈正殿ハト千龜ニ似タヨ出テヤ

スツコミ、夫ヨヒ、首カアフナイ
トウタヒレトナリ

松平藏人殿御死去之事

岡崎ニハ小豆坂合戦ノ日ハ城ヲ堅ク守リ
駿河衆ハ多勢ナレハ御心安シト云ヘ共万
一難儀ニ及ハ、廣忠公打出サセ給ヘキタ
メノ御物見トシテ其日ノリ侍三十人大西
山ニ上置レケル所ニ松平藏人殿織田彈正
ノ上和田ノ陣ニハセカ、リ給ハントテ三

百餘人ノ兵ヲ率シ生田ノ城ヲ打出大西ニ
掛リ坂ヲ押上給フ所ヲ山ヨリ岡崎三十人
ノ者共見下シテ一家ノ主トハ云ナカラ御
敵ニ成給ヒカ、ル大亂ヲ起シ刺ヘ岡崎ノ
城ノ城下ヲ輕人シ押通り給フ事ニクサモ
ニクシイザ、ラハ一矢ツ、射カケ申サン
ト塚ノ邊リノ小柴ノ陰ニ立隠レテ矢ヲハ
ラ、ト射カケテ明大寺ノ郷ニ打下シ足
早ニ引取バ藏人殿岡崎ノ方ニ向テ真黒ニ

成テ追カケ給ヘハ付入ラセラレテ悪カリ
ナント明大寺ノ町口ニテ取テカヘシ矢ヲ
放シテ防ケレハ誰カ矢トハ知ラス藏人殿
内甲ニカラリト入テ馬ヨリ真倒ニ落給ヘ
ハ歩ミ寄テ指ツメ引詰散々ニ射伏追散シ
テ藏人殿御首ヲ取公ノ寶檢ニ入奉レハ御
覽シモアヘス御涙ヲハラ、流サセ給ヒ
誠ニ一旦ノ御奢ヲオサヘ奉ラン為ニコソ
三木ノ城ヲモ築取タレ思外ニ大敵ト成給

ヒテ割如此ノ有様見果ツル事ノハカナサ
ヨト御愁腸淺カラサリケレハ御前モ面々
モ其袂ヲシホリケリ

傳云松平藏人殿ニ岡峯ノ士共大西山ノ
古塚ノ邊ヨリ射カケタルト語り傳フ古
墳三ツアリ

一ツニハ浄瑠璃塚ト云此邊リハ昔鎌倉
往還ノ街道ニテ東矢作ノ宿ト云テ兼高
長者カ上屋敷有其姫浄瑠璃ノ前カ菅生

カ淵ニ身ヲナケタル死骸ヲ爰ニウツメ
タリトカヤ

ニツニハ麝香塚是ハ淨瑠璃丸シテ後義
經平家追討ノ為東ヨリ上リテ長者カ宅
ヘ立寄ラレシニ局冷泉ノ尼淨瑠璃ノ前
カ形見ナリトテ麝香ノ臍ヲ義經ノ給ハ
リシニ夫ヲ埋ラレシ塚ナリトカヤ
三ツニハ繪女房塚殊ニ久敷古塚ナリ古
ヘ何レノ御時ニカ帝ノ御前ニイツチト

モナク一人女アラワレ出色香コトナル
花ノ顔一度笑ハ百ノ媚妙ニシテ露ヲ含
メル糸菽ノ風ニタワメル姿ハモロコシ
ノ楊貴妃李夫人我日ノ本ノ衣ツキ通姫ト申
共カレニ向ヒナハ鏡ノ影モ耻又ヘシ暫
ク禁庭ニ徘徊シテ書ケスヤウニ失ニケ
リ帝ソ、口ニ獻慮ナヤマサレ俄ニサソ
フ戀風ニ浪立沢ノ初物ハナ穂ニ出テ夫
トハイワシ口ノ岡部ニ立ル姫小松本ヨ

ケニ見ユルカスカ野ノ若紫ノスリ衣忍
フノ亂レ限リナク松浦サヨ姫ニアラネ
トモヒレフシテ床ニ忙然トナラセ給ヒ
有シト見ヘシハカナサハ御睡ノ内ノマ
ホロシニテソオ口シケル其夢ノオモカ
ケヲ画工ニ命シテ繪カ、シメアマネク
天下ヲ尋ネシニ此里ノ富家ニ年ノ齡ハ
二ハ斗リノ美人深窓ニヤシナヒシカ此
繪ニ少シモタカハサリケレハ急キ犬内

ニ召入テ后妃ノ位ニ備ハリテ後古里戀
シクヤ思ヒケン万年ノ後ナキカラヲ此
所ニ葬^{ハツル}リシ其塚ナリ藏人殿ニ矢ヲ射カ
ケシハ中ニモ此塚ノ陰ナリ

廣忠公御矢死之事

廣忠公小豆坂ノ合戦ノ比ヨリ少々御所帯
差登リ中比少々御快氣有シカ俄ニ再發シ
御年二十七歳ニシテ天文十八年己酉三月
六日御逃去アリ御法名 瑞雲院殿贈亞相

應政道幹大居士ト申奉ル扱又廣忠公御年
若クテ終ラセ給フ若君ハ尾州ニ御坐有ケ
ルニ依テ岡崎ノ本丸ハ大久保新八郎ニノ
丸ハ田中庄次郎御城代トシテ相詰ケル此
由今川へ申達シケレハ近日軍勢ヲ催シ安
城ノ城ヲ攻落ヘキ由返答アリ

傳云御病死ト有レ共實ハ廣瀬ノ領主佐
久間九郎左衛門智畧ヲ以テ一人ノ浪人
ヲユシラヘ御家ヲ望シメ新參ニ出シ置

能々立廻リ後ニハ御前近ク召仕ハサレ
ケル所ニ風眼ヲ疾テ一眼ニ成ケレトモ
御氣ニ入御側チカク召仕ハレ人々皆目
弥ハト申ケル彼ノ者ニ佐久間兼々申合
メ置ケルニヤ或時御昼寝アリケル所ヲ
不意ニ打奉ル走り出ル折カラ上村新六
郎外城ニテ追カケ討止ケル新六郎御ニ
代ノ主君御敵ヲ打止ケルモ不思議ナル
宿縁ナリ其上阿部弥七郎カ狂亂シテ先

年清康公ヲ打奉リシモ村政ノ刀今度弥
ハカ廣忠公ヲ討奉リシモ村政ノ刀其後
三郎公御切腹アリケルモ村政ノ御眼指
ナリケレハ御不吉ノ例ナリトテ上作ナ
レ共村政ハ御道具ノ數ニハ用ヒラレス
夫故御當家ハ村政カ作ノ打物ハスタリ
シトナリ

安祥城攻之事

駿河ノ今川義元雪齋法師ヲ大將トシテ駿

遠兩國東三河ノ勢ヲ催シ織田三郎五郎カ
篋タル安祥ノ城ニ指向ハレ七重八重ニ取
廻テ息ヲモツカセス攻タリケリ関矢叫ノ
音大塊ニ開キ渡リ蒼天モ崩落ルカト覺タ
リ去程ニ岡崎ノ御譜代ノ面々ハセ替リ案
内ハ知タリ先カケシテ諸勢八方ヨリ一同
ニ衆カケテ親ウタルレトモ子ハ返リ見ス
主討タレテモ從者ハ助ス我先ニト城中ニ
亂レ入四角八面ニ追詰敵ヲ悉ク打取織田

三郎五郎ヲ生捕ニシテ雪齋坊ヨリ彈正方
へ使者ヲ以テ人質替アルヘキヤ左モナク
ハ三郎五郎殿ヲ害センヤト申遣ハシケレ
ハ人質替有ヘクト返答シ日限りノ極有テ
五ニ人数ヲ揃ヘ行列ヲ正シテ堺川ニハ出
合織田三郎五郎ヲ渡シ松平竹千代公ヲ岡
崙ノ御家人請取奉リテ喜悅ノ眉ヲ開キテ
御城ニ御供シイツキカシツキ奉リテノ後
駿河へ御越アリ十九歳ニナラセ給フ迄駿

河府中少將町ニ御坐ナサレテ後ニ元康公
ト申奉其後ニ家康公ト申奉リシ御事ナリ
傳云廣忠公御幼年ノ時井田歸陣ノ諸兵
伊賀八幡宮ニ参詣シテ今日ノ戰場ニ於
テハ幡大神御奇瑞アリシ物語リヲ官司
聞テ奇異ノ思ヒヲナシ即神殿ノ戸ヒラ
ケ開テ拜シ奉ルニ忝モ御神躰ヨリ玉ノ
御汗ヲ流サレ御手ニ持セ給ヒシ御弓弦
返シテ銀羽ノ矢向ノ扉板ニ立テ見ヘタ

リ譬末世タリトイヘトモ皆人至心ニ誠
ヲ尽時ハ神明ノ擁護ムナシカラサル奇
瑞ノホト有カタカリケル御幸ナリ其節
御鳥居井田ノ方ヘ八寸斗アユニ寄ケル
事ハ里民ノ口碑ニ殘レル所ナリ

